
とある時空の並行旅人～パラレルトラベラー～

ゆーたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある時空の並行旅人〜パラレルトラベラー〜

【Nコード】

N6475L

【作者名】

ゆーたん

【あらすじ】

とある騒ぎの現場の道路に残った一筋の線。これはまぎれもない学園都市230万人の頂点、レベル5の能力者第3位、御坂美琴の超電磁砲レベルガンと同じ能力を使うものが居るということだった。そしてこのころを境に、能力者誘拐事件が発生する。犯人の目的は？その能力者の正体は？

パクリにパクッタ2次小説（笑）

T1 もう一人の超電磁砲?? (前書き)

文章能力レベル0です。

のんびり追記しつつ書いて行きます。

少しでも楽しんでもらえたらと思っています。

T1 もう一人の超電磁砲??

総人口230万人の8割が学生の学園都市。ここでは学生全員を対象にした超能力開発実験が行われており、全ての学生は能力の強さによって6段階に分けられている。レベル0と呼ばれる無能力者から、レベル5と呼ばれる超能力者までが、この学園都市内で生活している。ここ数ヶ月の間に幻想御手事件や乱雑解放事件、ツリーダイアグラムを搭載した衛星の破壊、各事件がごく一部の人間によって処理、解決されてきた。それ以外の人間はそうとはしらず今も変わらず生活している。学園都市は23学区に分かれており、学生達はその中の第7学区で生活している。

「ずいぶん違うんだな・・・」

9月の夕暮れ、橙色の強い日差しを浴びながら屋上の手すりに体を預けている男子生徒。9月も終わりというのにまだじっとりとした暑さが残る。手帳のページをめくりながらメモを追記していく。黒字と赤字、それらが混在し彼以外にはわからないくらいはつきりいつてぐちゃぐちゃである。第7学区にある荒八戸高等学校、その屋上で彼は再度ため息をついた。手帳の最初のページをめくりそこに書かれているものを再び目にした。暫く見つめた後手帳をしまい、校舎内へ入った。静けさが充満する下校時間後の校内。対面からくる教師にお小言を言われ足早に校門を出た。どこかのお嬢様中学と違って門限等につるさくはないのだが、教師は最近口うるさくなってきた。原因は言われていないが、彼には思い当たる節があった。と、いろいろ考え始めたがめんどくさくなって、思考を停止させた。こんな日は気分転換ににぎやかな商店街へ向かった。

「もう、お姉様ったら」

茶色の髪の毛を二つしばったツインテールの少女。同じ制服を来たショートヘアの少女の腕に自身を絡める。

「やめい」

と同時にゴンという鈍い音が響く。

「ひどいですのお姉様」

叩かれた部分をさすりながら視線をお姉様と呼ばれた少女へ向けた。当然よ、とばかりにため息交じりににらみつける。二人の後ろを歩いているセーラー服に紺のスカートの少女二人も苦笑い。

「白井さんは相変わらずですね」

黒髪でロング、白梅の花を模した髪飾りをつけている少女は、隣を見やる。同じ制服でショートヘアに造花の飾りを付けた少女も半ば失笑ぎみに笑っている。

「あ、そうだ。今度の日曜日、Seventh mistで服のパイゲンやるみたいですからいきませんか？」

「佐天さんも広告見たの？」

提案した黒髪ロングの少女、佐天 涙子と茶髪のショートヘアの御坂美琴は鞆から同じ広告をだした。

「へー30%〜70%オフなんですわね」

花柄のヘアピンをした初春 飾利は広告に目を通す。

「お姉様〜。もしやおもいますが、いつぞやみたいになゲ・コ・太のイベントショーがあるとかじゃないでしょうね」

ギクつとばかりに美琴の体が一瞬強張る。涙子と初春が広告に目を配らせると、裏面のすみっこにその名前が。はーんとばかりににやけた目を美琴へ向ける。

「そそそそんなことないわよ。普通に買い物よ」

「お姉様、強がらなくてもいいんですよ」

黒子はこれでもかというくらい追撃。みなれた黒子と美琴のやりとりで涙子と初春は笑ってみている。

そんな中ふいに黒子は何かを感じ取る。周囲で誰かが能力を発動したようなそんな力場を。ふいに悲鳴が上がる。近くの交差点に人だ

かりと砂煙が上がっている。初春、と呼ぶと同時に緑色の腕章を取り出し右腕にピンでとめる。「お姉様と佐天さんは下がってくださいな」

そういつて黒子は自身の能力「空間移動」テレポートで飛んでいく。

騒ぎの中心を囲むようにいた人ばかりは、豪快な音と衝撃ともに悲鳴を上げ逃げ出す人もいた。中心には二人の男。一人は黒革のジャケットを着たすこしゴツイ印象の短髪な男、もう一人は制服のズボンに半そでのワイシャツの見るからに学生の男子。

「てめえ・・・どこのもんだ」

ゴツイ男は近くの歩道に止められた自転車に視線を配る。自転車が数台宙へ浮き上がり男の頭上へ移動した。

「それが能力か」

「そつだ」

その言葉と同時に自転車を学生へ投げる。人が投げるのと違い思った以上の速さで自転車が飛んでくる。

「うわ、ちょ・・・あぶな」

ぎりぎりの感覚で避け続ける。

「油断するなよ」

一瞬勘が働いたのか後ろを振り向くと、地面に転がっていたはずの自転車がこちらへ向かってきていた。1台目を間一髪でよけるもその死角から飛んでくる自転車。腕を交差させ防御するも激痛は逃れられない。

「いてててて」

自分の上に重なった自転車を足でどける。

「はっは、どうした。お前はジャマだからここで消させてもらっ

「ちよつとまで、ここじゃジャマジャマ風紀委員が来ちまうし」

「うるさい」

男は、この騒ぎで乗り捨てられている黒いバンタイプの車を持ち上げる。割と簡単に持ち上げることができたのは、彼の能力者の力が

わりと強い事を意味している。

「まったく・・・しょうがねー。もったいねーけどこっちも使うぜ能力を」

学生はポケットから1枚コインを取り出す。

「うるせーガキだ。お前に何ができる！」

学生は親指でコインを上にはじく。クルクルと回転しながらメダルはやがて降下を始める。

「おりゃー」

男はまるでブーメランを投げるかのように水平に車を学生へ向けて飛ばした。先ほどの自転車とは違い回転しながら学生の方へ飛んでいく。男は車の陰で見えてはいないが、学生は体からバチバチという音と共に体から電磁力が帯電していく。そう常盤台の彼女と同じように。最大に貯めた電磁をもつて落ちてきたメダルを親指ではじき出す。電磁加速を得たコインは音速を超え飛んできた車を貫通、またその衝撃で車は学生とは別の方へはじかれ、ガードレールをへこませ動きをとめた。コインはそのまま男の額を強打、男は数メートル後方へ吹っ飛んだ。男は白目をむいて、完全に沈黙。道路には一直線にこげた黒い線が残り砂煙を上げた。

「シャッジメン風紀委員ですの。ここで・・・あら？」

黒子がレポートしてきた時には、事の残骸と白目を剥いて倒れている男・・・そして

「これは・・・お姉様と同じ・・・」

道路に残った一筋の線。これはまぎれもない学園都市230万人の頂点のレベル5の能力者第3位、御坂美琴の超電磁砲レベルガンと同じものと黒子は思った。

「黒子ー」

現場へきた美琴、初春、涙子は道路の線を見て同じことを考えていた。

「黒子・・・これって」

視線を黒子へ向ける。黒子はゆっくりと線のところへと近づき片膝をついた。

「これってどうみても」

初春の言葉を肯定するように黒子は頷いた。

「そうですわ。これはお姉様と同じ・・・レールガン超電磁砲ですわ」

T2 仁科 司（前書き）

ありきたりな設定だったりですけど、お楽しみください。
のんびり更新して行きます。

とあるは両方ともアニメしか見たことないので、間違ってる部分もあるかと思いますが、大目に見てください。

T 2 仁科 司

「ほんつと退屈しない街ね」

帯電した電磁力が体をかけ、周囲には煙のような湯気のようなものが立ち上っている。彼女の周りにはこげつき、こきざみに痙攣している男が数人コンクリの上に寝そべっている。いわゆる普通の不良だが、彼女は外見もよくいろんな意味で男が寄ってくる。もちろん女の子もだが。特に学校が終わった夕方など、ナンパ目的の不良がよってきて電撃を浴びせられると言うおなじみのパターン。すこしは手ごたえのある男なら彼女もわくわくするのだろうが、レベル5の彼女の敵になる男はそうはいない。

「うわー、派手だなー」

こんなとき決まって現れるいつもの男。そう思っただけ振り返った彼女の目に入ってきたのは、想像していた男とは違う別の男。やれやれと思いつつ彼女は返答する。

「なに？あんだ、こいつらのツレ？」

寝ている男どもを指差す。

「ん？その制服・・・荒八戸高」

ワイシャツの胸ポケットに刺繍されている校章で彼女は判断した。

「いや、常盤台のエースの力を見たけど、あんまり大したことなさげだなーっ」と

「あん？」

学生の言葉に少しイラッと来た彼女、美琴は学生をにらみつける。

「あんだ、あたしにケンカ売ってる？」

学生は両手を前に出し首を振る。

「いやいや、レベル5様におそれおーい」

「あんだ、いちいち言い方が気に入らないのよ」

体に電磁が走る。青白く電が体を駆け巡る。少し学生の口元がにやつとしたのを見た美琴は完全に頭に血が上った。

「あんだ、今笑ったでしょ。大したことないか体感してみなさい！」
体から放電された雷は彼を直撃した。少々頭にきていたから、手加減をしているといっても先ほどの男どもより強めに放っている。

「こんなところでやったら、周囲は停電やら警備ロボがきちやうぜ御坂さん」

学生は無傷でさっきの場所に立っていた。

「そんな」

美琴は前にもこんなことがあったのを思い出した。幻想殺し（イマジンプレイカー）の右手を持つ上条当麻とのやり取りだ。そのときとまったく同じ、彼だけが無傷な状態。

「ありがとさん、これがあれば大丈夫さ。それじゃ」

そういつて学生は駆け出していった。

「ちよつとあんだ」

その声をさえぎったのは、ルームメイトの白井黒子の声だった

黒子は白目を剥いた男をアンチスキルへ引き渡した。現場の後処理も含めてアンチスキルに任せ、美琴たちは涙子の提案で、いつものクレープ屋へ向かう事にした。

「ねえ黒子」

「なんですの？お姉様」

「やっぱりあれは・・・あたしのと同じよね」

「ええ。実際に見たわけではありませんが、恐らく周囲の痕跡から察してもお姉様と同じだと思いますわ」

「でも、御坂さんと同じという事であればバンク上のデータにも同じ能力者として登録されるはずですが、そんな人がいれば有名なはずですが聞いた事ありません」

美琴、黒子、初春の三人はその場に立ち止まって、自身の思考を巡らせる。

「あ、あの〜考えてるのもあれだし気分転換でことで行きましょう」

「そうですね。今はまだ情報もございませんし、あとで固法先輩

とかにも聞いて見ますわ」

「わ、私も情報を集めてみます」

やっと三人がいつも通りの柔らかい表情になったのを確認した涙子は、さあとといって初春の背中を押した。

「わわ、ちよつと涙子さん」

「御坂さんも白井さんも早く行きましょう」

美琴と黒子はお互い目を合わせくすつと笑い、二人の後を追った。

「ガズヤちゃん」

女性の悲痛な叫び。それとほぼ同時に車が急ブレーキ音、そしてゴムがこげた嫌な匂い。美琴たちは急いで声がしたほうへ駆け出した。そこは信号のない横断歩道だけがある道。歩道に座り込む女性。十字路には急ブレーキ音を響かせた車に、子供を抱きかかえる学生の男子。

「あ」

美琴を声を漏らした。

「お姉様、どうかしまして？」

「ちよつとね・・・なんでもないわ」

美琴は黒子達と合流する前にあつた学生男子だとすぐに気づいた。座り込んでいた女性が慌てて子供と学生のほうへ駆け寄る。車の運転手も慌てた様子で降りて出てきた。子供を叱り付ける女性、母親なのだろう。目には涙を浮かべ学生に頭を下げる。運転手も申し訳なさそうに三人に頭を下げた。学生は顔を横に振りながら、笑顔で話している。

「気をつけるんだぞー」

「ありがとう、おにいちゃん」

そういつて母親と子供は歩いていった。運転手にも問題ないといった感じで体を無駄に動かしている学生の姿を美琴たちは遠目からみていた。学生の説得で納得したのか申し訳なさそうに車に乗った運転手は、もう一度学生に声をかけその場を後にした。

「大丈夫ですの？」

急に背後から声をかけられた学生は身をすくめた。後ろを振り向くとツインテールの髪の女の子が立っていた。

「びっくりした。だ、大丈夫です。心配ありがとう」

まだびっくりしているのか、彼はそういつてぎこちない笑顔を見せた。ツインテールの彼女の向こうから近づいてくる三人の人。その一人を見つけた瞬間、彼は一瞬固まった。

「やっぱり、あんたさっきの」

今にも走って来そうな美琴よりもはやく、彼は駆け出した。

「さいならー」

「まてコラー」

走り出す美琴。

「お待ちを」

黒子は腕を横に突き出し、美琴を制した。慌てた初春と涙子が駆け寄ってきた。

「お姉様、落ち着いてくださいますし」

「御坂さんどうかしたんですか？」

「御坂さんの知り合い？」

「いや、知り合いつつーかさっきみんなと合流する前に絡まれたつーかなんというか」

「まあ、お姉様。また私達に頼らずご自分で」

「だって風紀委員ジャッジメントが来る前に終わっちゃうんだから」

「それにしてもお姉様を相手にして無事とは、あのにつっき類人……つてあら」

黒子は地面に落ちている黒い物に気がついた。

「これは」

その黒い物体を拾い上げる。

「白井さん、なんですか？それ」

「はて？手帳？」

ひっくりかえすとそこには荒八戸高等学校と記されていた。

「生徒手帳ですわね。さっきの学生のものでしょうか」

一枚めくると写真と共にその人物の名前が書かれていた。

「にしなつかさ仁科司。荒八戸高校2年普通科」

「ふーん、あいつ仁科っていうのね」

そういつて美琴は黒子から生徒手帳を取り上げた。

「ちよ、ちよつとお姉様」

「これ、アタシから返しておくわ」

黒子も負けじと美琴から奪い取る。

「お姉様、これは落し物ですの。落し物は私達、ジャッジメント風紀委員がお返し

致します」

これから美琴と黒子がいろいろやり取り始めた姿をみて、初春と涙

子は

「またはじまったね」

「そうですね」

いつもどおりの光景に少し苦笑いした。

T2 仁科 司（後書き）

個人的に佐天さんと黒子がお気に入りですよ（笑）

T3 行方不明（前書き）

なんか文章がうまくかけなくててこずります。
うまい表現が全然おもいつかないですが、3話目です。

T 3 行方不明

息を乱し、ライトブランの髪の毛を乱しながら彼女は、一心不乱に路地を駆け抜ける。時々後ろを振り返りながら路地を細かく曲がり大きな通りを目指す。このあたりは住み慣れている場所なのに、商店街の通りや人通りの多い道になぜか出られない。気づけばどんどん一通りもなく薄暗く細い路地へ入ってしまった。

「はあ・・・はあ・・・」

必死になりながら奥へ進むと奥にはビルに囲まれた・・・

「行き止まり・・・」

慌てて戻ろうとすると、路地から一つの影が出てくる。薄暗く顔ははっきり見えないが体のラインから女性というのは伺えた。

「な、なにか御用ですか」

震えながらも必死に搾り出した声で問いかける。

「・・・・・・」

地面を踏みしめ近づく足音。必死に問いただした彼女に対し、望むべく答えもなく非常な足音だけを返す。彼女は近づく人影に対し少しずつ下がる。後ろのビルまではまだ少し距離があるはずだが、不意に何かに背中がぶつかる。

ガッ・・・・・・

彼女の意識はそこで途切れた。

「こいつの力は？」

「この端末を信じるならレベル3って所ですね」

「まあまあか・・・」

女性と思われる人影は携帯を取り出し、キーを押しコールのボタンを押した。数回のコールが鳴り電話の向こうから男の声が聞こえた。

「お疲れ様です」

「ああ、今レベル3を捕まえた」

「では1人分の装置を準備しておきます。」

「時間まで残り少ない。目標をそろそろ確保に入る」

「わかりました。・・・ところで一つ問題が」

「あ？」

女性の声が少しだけ強張る。それに対し電話の男は少しだけ声のトーンが小さくなった。

「門脇がアンチスキルに拘束されました」

「・・・そうか」

チツと舌打ちをした。

「ほつとけ。やつも覚悟の上だ。今は確保優先だ」

そういつて通話を切った。

「姉さん、僕もそうやって首切られたら嫌ですわー」

茶化すようにもう一人がつぶやく。

「ふん、それより解除しろ。移動する」

「わかりました」

そういうと同時に徐々に車の音、通行人の雑音、会話が聞こえてくる。日差しはオレンジで二人の足元を照らす。そのまま日差しに素顔をさらすことなく、薄暗いほうへ消えていった。

「白井さん」

校内の廊下を歩いているときに呼び止められ、黒子は振り返る。そこへ近づいてい来る明るめの黒のロングヘアの女の子。

「あら、泡浮さん。どうかしまして？」

顔を強張らせた彼女はいつもより口調を早めていた。

「じ、じつは・・・」

「湾内さんがいなくなっただ？」

お昼休み、黒子と一緒に昼食をとっていた美琴はサンドイッチを銜えたまま、今日一緒に昼食をとっている泡浮のほうに目をやった。

「そうなんです。昨日から寮内でも姿を見なかったです。夜も朝も

部屋へいったのですが鍵が閉まっています」

湾内わんない絹保きぬほと泡浮あわつき万彬まあやは一緒の学舎の園内の学生寮に住んでいる。

「寮長には話した？」

2個目のサンドイッチに手を出しながら美琴は聞いた。もちろん、
とうがかわりに泡浮は頷いた。

「ええ、警備員アンチスキルにも搜索依頼したようです」

「風紀委員ジャッジメントのほうにも、搜索の依頼はきておりましたの。ですが・
」

黒子は少し視線を落とした。

「ここ数週間の間に、湾内さん以外にも行方不明になった能力者の
方がおりますの」

「能力者の・・・行方不明・・・」

「湾内さん大丈夫でしょうか」

黒子ははつとして、いつもの表情で泡浮をみた。

「大丈夫ですわ。警備員アンチスキルの方々と協力して、必ず見つけて見せます
わ」

「そうよ。きつと見つかるから安心して」

「はい」

目に涙をためた泡浮は、二人に言われ少し安心したのか先ほどよりも安堵の表情を浮かべた。対象に黒子は表には出さないが、この能力者限定の行方不明の事件に何か嫌な予感を感じていた。美琴はそれを知ってか知らずか、

「もーらい」

と行って、黒子が手に取っていた口をつけていないサンドイッチにかじりついた。

「まーお姉様だったら・・・でもこの食べかけのサンドイッチ・・・
わたくしの手に持つこれは・・・お姉様との間接・・・」

「やめい」

いつもの美琴の怒号が響いた。

「聞きましたわよ」

突然の声に三人ともびくついた。背後にいたのは扇子がトレードマークの・・・

「わたくし、この^{こんごう}婚^{みつこ}后^こ光^{こう}子^し もご協力いたしますわ」

「婚^{こん}后^{ごう}さん、ありがとう」

「とーぜんですわ」

「どーでもいいですが、邪魔だけはしないでいただけます？」

「白井黒子さん・・・それは誰に向かっておっしゃっているの？」

そんな事を言い合っているうちに昼休み終了のチャイムが鳴った。

あわてて四人は片付けてそれぞれ教室へもどる。

「！」

そんな中何か視線を感じた美琴は立ち止まりあたりを見渡す。特に何も見当たらないため、後ろ髪を引かれながらも教室へ戻っていた。

T3 行方不明（後書き）

いつもお読みいただきありがとうございます。
なんか10話くらいで終わりそうな量ですが、
頑張っ
て書いていき
ます。

お気軽に感想やご意見くださいませー

T 4 遭遇（前書き）

4話目公開します。

戦闘シーンとか心理描写とかうまく表現できないのがくやしいです。

ではお楽しみください！

T 4 遭遇

風紀委員第177支部の室内で、初春はPCと向かい合っていた。
しかもひとつだけではなく、複数のモニタ・端末を同時に操作しあ
らゆる情報を検索している。

「はい、これ」

セミロングでメガネをかけた女性が差し出したカップを、初春は受け取りカップのないの飲み物に口をつけた。

「固法先輩、ありがとうございます」

「どう？調子の方は」

「それが・・・」

再びモニタへ目をやり、またキーボードを操作し始める。

「目撃情報が一つもないんです」

「一つもなの？」

「はい、不自然なくらいに。最後の目撃情報も学校だったり、お友達を遊んでいたときだったりくらいで」

「たしかに・・・それは不自然ね」

「念のため光学系の能力者を調べましたが、全員にアリバイがあります。寮内もしくは複数名の目撃があるため、除外してもいいと思います」

固法はカップ内の飲物をすべて飲み干し、ため息のように一息はいた。とその時デスクの上に置いていた初春の携帯がなった。「はい、もしもし」

「初春」

黒子の声に、この後聞かれるであろう問いに必要な情報をモニタに表示させる。

「なにかわかりました？」

「それが、不自然な点があります。目撃情報が一つもないんです」

「一つも・・・それは確かに不自然ですわね」

「光学系能力者を確認しましたが全員アリバイがあります。それに・・・」

「それに・・・なんですか？」

「監視カメラのデータに、行方不明者が映ってないんです」

「そんな事があるはずが・・・」

「行方不明者すべてが学生ですが、校門をでたあとから監視カメラに姿が残ってないんです」

「わかりましたわ。初春は引き続き情報を集めてくださいな」

「わかりました」

そういつて黒子は電話を切った。いろいろ頭の中で考えては見たが、監視カメラに映らないなどありえない事、しかしそれが現実になっている。そんな事を考えつついつもどおり学区内を巡回する。

「いたい・・・どういうことですか？」

答えの出ない出来事に、黒子は少し焦っていた。そしてふと気づくとあたりに人影はおるか車、それに人々が生活をしているという音が消えていた。

「これは・・・」

周囲を見渡すと近づいてくる人影が1つあった。黒髪で膝くらいまである長い髪、整ったボデイレインから相手が女性と言うことだけは黒子にはわかった。

「ジャケット風紀委員ですの。これはあなたの仕業・・・と言う事でよろしくて？」

「テレポーター空間移動・・・白井黒子か・・・ずいぶんデカイのが見つかった」

「ずいぶん余裕ですこと。こちらはあなたにお聞きしたい事がありますの。ゆつくりしている時間はございませんわ」

黒子はテレポーター空間移動して一瞬で間合いをつめる。しかし女は黒子に触れる事なかったが、黒子は後方へと弾かれた。

「ぐっ」

自身の能力で地面に着地する。視線を相手に向けたが、先ほどの位置にその姿はなく

「あ」

不意の後ろからの衝撃で前方へと飛ばされる。よろけながら立ち上がった黒子の視線の先に、女と後方で塀の上に座っている男がいるのを確認した。

「よそ見してていいのか」

一瞬で黒子の横に移動した女は、黒子の方へ腕を横に振りぬく。黒子の力で空振りに終わったその腕は空を切った。太ももから抜いた鉄矢を女の方へ投げる。それを難なく受け止めそのまま地面へと捨てる。

「おもしろいものを使うな。だが・・おしまいにしよう」
女はすつと黒子の方へ手を伸ばす。

ズン

「ぐっ・・・これは」

重力場を操る・・・急な異常な重力、女の能力をなんとなく理解していた。しかしその思考を止めるかのように徐々に体にかかる重力が増していく、なすすべなく地面にはいつくばった黒子の体はミシミシと音を立てながら地面に押しつけられる。

「う・・・」

押しつぶされているため、上手く呼吸ができない。それにより演算がうまくできず、黒子の空間移動テレポートが出来ないでいた。そして黒子は意識薄らいでいく意識の中で、近づいてくる足音を聞いた気がした。

T 4 遭遇（後書き）

犯人と黒子が退治する場面でした。

他の方のを参考に表現を加えて見たりしてます。

では次は5話目でお会いしましょう

T 5 来訪（前書き）

ついに五話目です。

いろいろ肝心な部分を省きすぎかもしれないね。
ではお楽しみください

T 5 来訪

黒子が気づいた時は、すでに冥土帰しの病院のベッドの上だった。ベッドの両脇には目に涙をためた初春や、美琴と涙子が名前をずつと呼んでいたようだ。カエルに似たいつもの医師の姿はなく、状態を美琴達に告げて部屋を出ていったらしい。

「ご心配をおかけしましたの」

「黒子、あんたがやられるなんて」

「あちらの方が、1枚上手でしたわ」

「犯人・・・見たのね」

美琴の目が感情が荒ぶれるのを黒子は感じた。

「お姉さま、いけませんわ。危険すぎます」

「だって黒子をこんなめに合わせたやつを、許してはおけない。それに湾内さんだって」

「初春、警備員アンチスキルに報告、それと固法先輩にも連絡を。私の情報をお伝えしません・・・っ！」

起き上がるうとした黒子は、肩の痛み之苦痛をもらした。「だめよ、まだ寝てなさい」

「ですが・・・」

「話すのは、寝たままでもできるでしょ・・・ね」

美琴の言葉に素直にしたがい、黒子は起こしかけた体をまたベッドにせずめた。黒子は2、3呼吸を整え口を開いた。

「相手は二人、一人は女性・・・もう一人は男性ですわ」

「相手は二人組み・・・か」

「ええ。男性は能力者かどうかはわかりませんでしたけれど、女性の能力はなんとなくわかりましたわ」

先の戦闘、触れずとも相手をはじく攻撃、それに体にのしかかる重さ、これらの事から推測させ

「重力・・・もしくは重力場を操る能力者かと・・・」

「重力？」

「ええ、周囲の重力を変化させられる能力者ですわ」

「ほかにはなんか思いついた事は？」

「そうですね、人気や雑音がいつさいなく、まるで今まで見たことない場所にいましたわ」

「どういうこと？いつも警邏している黒子が道に迷うはずが」

「ええ、迷うはずはないはずですのに、私の知らない所におりましたの」

「つまり、そんな場所に出たらやつらはくるのね」

「お姉さま・だめです」

「いいから。あんたは寝てなさい。あとはお姉さんにまかせなさい」
そういつて美琴は病室を飛び出していった。

「ふっふふーん。我ながら女の子みたいだな」

病院の廊下を花を挿した花瓶を両手でしっかりともち、鼻歌混じりに歩いていた。前方でガタンと大きな音が聞こえたので目をやると女の子がすごい勢いでこちらに走ってきた。自分が見えて居ないのか加速はしても減速することなく横を走り去って言った。

「病院は走つたらいけないですよー、御坂美琴さん」

そういつて先ほど彼女が閉めた扉の前に立ちドアノブにてをかけた。

「初春、急いで固法先輩に警備員アンチスキルに情報を伝えるように連絡を」

「わかりました」

飛び出すように部屋の入り口に向かった初春は、ドアノブに手をかけた。勢いよく開かれたスライド式のドア。

「きゃ」

「うわ」

何かにはじかれ初春は尻餅をついた。いたたとお知りやさすりながら立ち上がった初春は、ようやく目の前の人物に気がついた。

「あ、すいません。ごめんなさい」

ものすごい勢いで謝る初春。

「いやこちらもすいません。どうぞ」

最後に一礼し、その人の横を通り過ぎ病院設置の公衆電話へと向かった。

「初春はほんとそそっかしいなあ」

涙子はそういいながらドアの方へ向かう。そして影から出てきたのは一度だけ見た事ある人物。

「あら、あなたは」

黒子は気づいたように、悲鳴を上げる体を起こした。

「どうも、白井黒子さんに佐天涙子さん」

手に持った花瓶を窓際の台の上に置き、初春との接触で乱れた花を整える。

「たしか・・・生徒手帳を落とされた・・・仁科・・・司・・・さんでしたかしら」

「正解です。生徒手帳を拾ってもらって助かりました。支部にいた固法さんから受け取りましたよ」

ズボンのポケットから手帳をとりだしひらひらさせた。

「まさか・・・そのお礼を言いに来た・・・というわけではありませんわよね」

仁科は何も言わず近くにあった椅子に腰をかけた。

「そうです。ですからバンクデータ等でそういった能力者がいるかどうか調べる必要があります。はい・・・はい・・・わかりました」
そういって初春は固法との電話を切った。ふうっと息をつき窓の外を見上げた。雲一つない青空。黒子が襲われたのはその前日。夕方の警邏の時間・・・見知らぬ場所に現れた能力者。まだ調べなければならぬことが山積のように感じられる。

「うーいーはーるー」

バサッ

初春の後側のスカートが大いにめくられた。

・・・

「きゃー、も、もう何するんですか佐天さん」

顔を真っ赤にさせ初春のもう抗議。涙子は相変わらずな感じで笑っている。自分でもわからないくらいいろいろ言った後でふと気がついた。

「さ、佐天さんがどうしてここに」

「んー、それがね、さっき初春がぶつかった人があの生徒手帳落とした仁科って人で、なんか白井さんに話があるからって事で席をはずしたわけ」

「話ってなんででしょう。しかも白井さんに・・・ってもしかして」
初春に走った嫌な予感。不安にかられ涙子を置き去りにし病室へ戻った。スライド式のドアを勢い良く開けて中に入った。

「白井さん」

息を切らし思った以上に大きな声でその人を呼んでいた。

「ど、どうしたんですの」

「はあ・・・はあ・・・よかった無事で」

安堵したのかそのまま床にへたりこんだ。

「初春おいてかないでよってあれ？」

遅れて部屋に入ってきた涙子は仁科がいない事に気がついた。

「白井さん仁科さんは？」

「ええ、もう帰られましたわ」

「な、なにかされませんでしたか」

「え？あの方が？初春、それで走ってきましたのね」

「そうですね、白井さんを狙っていた能力者かと思いましたが」

「私がみた犯人と違いますし、それにあの方は安全ですわ」

「ほんとに大丈夫なんでしょうか」

心配そうな初春をよそに、黒子は少し微笑んだ。

「仁科さんですよ、助けてくださったのって」

そういつて黒子は開け放たれた窓の外へ目を向けた。

T 5 来訪（後書き）

んー絡みとか口調が難しいですね。
では次は6話でお会いしましょう。

T 6 美琴VS(前書き)

おまたせしました6話目です。

回を増すごとにぐだぐだも増すパラレルトラベラー。

話の主軸もトラベってるかもしれないませんが、

それではお楽しみください

T 6 美琴VS

「っどこにいるのよ」

ぴりぴりと殺気だち、街中を走り回る。走れども探せどもいつもの自分の知っているいつもの街に風景に道、黒子の言ったような実知らぬ場所には一向に出くわさない。気づけばいつもの古い自販機のある公園についていた。

「あー、どこにいんのよおお」

くるりと回転し、自販機の側面へ見事な蹴りを決め、その衝撃でできたジュースを取り出した。黒いフォルムのおずきサイダーとかかれたジュース。企業の開発した新商品等、学園都市にすぐ入荷される。そのため外ではまだ販売されていない商品などが多い。

「すぐにキブツハソンノオソレアリみたいな感じで、警備ロボットがきちやいますよ」

「ん？ああ、あんた。仁科・・・だっけ」

美琴の方に歩み寄り、体を回転させ美琴と同じように自販機を蹴る。同じように出てきたジュースを取り出した。

「あっち・・・スーパカレー・・・まあいつか」

プルタブをあけ中身を飲む。

「あんた・・・何の用よ」

鋭く警戒したように仁科をにらみ付けた。まあまあといった表情でスーパカレーを喉に流し込む。

「そんなに警戒しなくても・・・」

「しかたないでしょ。ま、今いらいらしてるから・・・あんたがあたしの相手してくるってーの？」

バチバチつと発電する。

「まあまあ。いらいらをぶつける相手は、黒子さんを襲った犯人に向けた方がいいんじゃないか？」

「そんな事言つて、あんたが犯人なんじゃないの？」

「あつはつは、そー言われるんじゃないかと思つたよ」
「ふつざけんじゃないわよ」

言葉を言い終えると同時に、仁科へ向けて電撃を放つた。特に逃げるわけでも彼みたいにも右手を出すわけでもなくそのまま直撃。しかし彼と同じように感電も吹き飛びもしない。ただ平然とそこに立っている。

「な、なんなのよあんた」

「なんででしょうー」

そういつて仁科は歩き出した。

「ちよ、ちよつと・・・どこいくのよ」

「ついてきてください」

手がかりもない今、美琴は彼に着いて行く事にした。

「ちよつと、どこまでいくのよ」

「ついてきたらわかるつて」

そういつて商店街通りの建物と建物の間の細い道へ入る。日差しは太陽に遮られ、昼間だと言うのに薄暗い。どんどん進んでいく仁科の後ろをついていくうちに、一つ気がついた。

(音が・・・消えた・・・)

「気づいた？もう相手のテリトリーに入ったよ」

この薄暗い道に入るまでには確かに感じた人影や雑音、それが今はいっさい感じられない。

(絶対・・・捕まえる)

湧き上がる怒りにも似た、高揚感のようなものを抑えつつ、自分の掌をしばらく見つめ拳を握ると同時に気を引き締めた。

「それでこれか・・・あれ？」

視線を上げた先には少しだけ開けた空間があるが、仁科の姿は見当たらなかった。

「ちよつとー・・・もう・・・あいつどこいったのよ」

ぶつくさ言いながらこの空間を歩いていく。あたりを見回してもただ普通の住宅街の道。しかし違うのは音も人影もない。しかし美琴

のするどく研ぎ澄まされた感覚は、向けられた殺気を感じていた。

「そこにいるんでしょー？出てきなさい」

「さすがだな・・・御坂美琴」

目の前の十字路の影から出てきたのは、黒子から聞いていた通り女性が一人。

「あなたには・・・聞きたい事がたーくさんあるのよ」

「ふふ」

「何がおかしいのよおお」

発電させた電気を女にめがけて一直線に飛んでいく。

「いい、いいねその力」

上に高く跳躍し電撃をよけた女は着地と同時に地面を蹴る。

「やるじゃない」

続けざまに電撃を放つ。左右にステップを踏み電撃をかわしながら間合いを詰める。

「くっ」

「どうした？」

(攻撃して来た瞬間に電撃を浴びせて)

ドン

不可視の衝撃に襲われ後ろの塀に体を叩きつけられる。塀にひびが入るほどの衝撃に美琴の意識が飛びそうになった。

「がっ」

地面に手をつき倒れそうになる体を必死に支える。

「こっちはたいしたことないな」

這いつくばっている美琴に近づき、女は美琴を蹴り上げる。ぎりぎりで手でガードするも先ほどのダメージが響いているのか、電撃を浴びせる余裕がない。

「くっ・・・う・・・」

「あーあ、楽な仕事だった」

「こっこのおお」

女に向けて突き出した右手から今の状態で放てる全力の電撃を放つ。
「むだ」

不敵に笑みを浮かべた女をよけるように、電撃が美琴の意図せぬ方向へ曲線を描き、女からそれていく。

「え……」

「もうおしまい？」

「く」

二度三度同じように電撃を放つても、同じように強制的に方向を曲げられ同じようにそれていく。

「な、なんで……ほんとに重力場を……」

「どんな能力かわからないでしょうね。重力場……そうねえ」

グン

「ぐ……」

上からの急な衝撃に地面に押し付けられる。

(こ、これ……じゃ、黒子の二の舞に……)

女は携帯を取り出し電話をかけた。

「今、どこ……」

「まずい……姐さん……すぐぐあぁ」

「おい、どうした……おい」

チツと舌打ちし通話を切る。

「くっ」

電撃を放とうにもうまく発電ができない。

「まあ、お前さえいれば」

ふと、辺りのから音が聞こえ出す。何気ない住宅街と思っていた場所が、何気ないいつもの見慣れた風景に戻ってかわっていく。

「ちよつと、あれ」

二人の状態を見つけた周囲の人がざわざわと騒ぎ始める。中には風シ

ヤッジメント

紀委員に連絡をするものもいたり、女はこれ以上目撃者が増える前にその場から走り出した。のしかかる力が消えた美琴は、よろけながら扉にもたれかかりつつ体を起き上がらせる。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「立てるか」

声をかけてきたのは、先ほど姿を消した仁科だった。

「あ・・・アンタ今の今まで」

怒りにも似たものをぶつけようと声を荒げたが、彼が引きずっているものに目をやった。

「誰？それ」

「さっきのやつ共犯者。あの空間の能力者なんです」

「もしかして、あたしを囿につかったの？」

「えっへっへ」

「あ、あ、アンタねえ・・・く」

電撃を浴びせてやろうと発電したが、受けたダメージの痛みで顔を歪める。

「とりあえず手当てしましょう。それとこいつを一応ね」

「ったく」

やれやれと美事は歩き出した。それを追うように仁科も歩き出した。

T 6 美琴VS（後書き）

いかがでしたか？

お、怒っちゃーよ（笑）

次回は7話です。

1日1話更新できるように頑張ります

T7 迷宮案内（前書き）

お待ちせいたしました7話目です。
まずはお楽しみください

T7 迷宮案内

「ちょっとー、もう・・あいつどこ行つたのよ」

自分に対して向けられているであろう言葉を聞き流し、彼女から遠く離れていく。学園都市内で見たことない静観な住宅街を歩きながら周囲を見回す。周囲に人がいたら怪しまれる事もあるだろうが、仁科は塀にびったり沿うように道の端を歩く。街の喧騒から切り離され聞こえてくるのは、自分の履いている靴が地面を蹴る音。それと彼女が言い放つ声。静かな分大きめの彼女の声は良く聞こえる。

「全部で3つ」

周囲を見回すとこの空間、住宅街では一際高いマンションが3棟立っている。自分達がこの空間に入ってきた近くに1つ。そのマンションを南だとすると北東と北西にそれぞれ一つずつ立っている。まるでこの空間範囲に沿うように。

「目測200〜300mくらいか・・・」

そうやって仁科は一つ目のマンションへと入っていく。外につけられている階段で徐々に上の階層へ上がっていく。一つの階に5部屋あり、全ての部屋を確認しながら上の階へ。全部で5階からなるこのマンションの部屋を全て確認したが、特に誰かいる気配もなく周りの住宅と同じように空であった。そのままふとマンションの屋上へと登った。マンションとマンションのちょうど中間に位置する場所で、青白い閃光が飛び交う。この空間で戦っているとすれば、御坂美琴以外いない。肉眼で御坂美琴ともう一人が交戦している姿を確認できるが、犯人の顔までは捉えられない。

「と、すると」

残り二つのマンションに視線を向ける。北東のマンションと北西のマンション。このマンションとまったく違って良いほど同じくりになっているのだが、それぞれ階が若干違う。北西が一番高く北東、そして仁科がいるこのマンションの順だ。北西のマンションに

目をやる。特に北東と同じようにこれと違って変わっている所はない。一つ違いがあるとすれば・・・

「見つけた」

そういつて仁科は足の裏から電気を放電し、マンションの側面を垂直に駆け下りる。周りは完全な箱庭といった状態で、家や塀はもちろぬゴミ箱から自動車等すべてがジオラマの如く再現されている。自身に電磁的な加速を生み出し、住宅街を失踪する。美琴が敵に捕まっては意味がない。そうならないように、全力で北西のマンションへと向かった。

「ふっふっふーふーふーん」

鼻歌を歌いながら双眼鏡を覗き込み、御坂美琴を観察する男。髪の毛の長い女に向けて放つ電撃は、当たる前に歪曲しそれていく。

「あーこりゃきまつたかな」

男は携帯に目をやる。

「6分42秒・・・これは僕の勝ちかな」

何か賭けをしていたのかわからないが、男はさらに上機嫌になった。

「何が勝ちなんだ？」

背後から聞こえた声に驚く振り返る。そこには学生の服おきた男。

「お・・・お前は・・・」

「見つけた。佐枝サエ・・・その双眼鏡、日の光でキラキラ反射してたぜ」

「くっ」

屋上の手すりにフックを引っ掛け、ロープクライミングの要領で下に下りていく。半分以上降りたが、ロープが足りないためしかたなくベランダに入った。部屋を勢いよく飛び出しあとは階段を使って降りていく。階段を駆け下りしていると携帯がなった。おぼつく手で慌てて電話へ出る。

「今どこ・・・」

「まずい・・・姉さん・・・すぐぐあぁ」

階段を降りきつたところで背後から吹っ飛ばされた。電撃をあびたかのように体がしびれて少し痙攣している。手から飛んでいった携帯も電撃のせいで煙を上げていた。

「ぐ・ドッペル・なんでお前がこっちに」

「それは仕事だからだ」

男の首根っこをつかみさらに電撃を浴びせる。

「あがががが」

「それにドッペルってお前に言われたくない」

「はあ・はあ・くそ」

「はやくこの能力を解くんだな。迷宮案内ロートケインだったか」

「だれが・とくもぎゃあああ」

男の言葉を聞き終える前にさらに電撃を浴びせる。そのまま男は白目を剥き痙攣すら反応しなくなった。そのとたん、この住宅街の風景がみなれた学園都市の風景に変わっていき、街の喧騒や気配・そして生活の音が聞こえ始めた。

「ふう、俺の方も打ち止めか・・・さてっと」

仁科は佐枝の服の首元をつかみ引きずりながら、美琴の場所へを向かった。

美琴はよろけながら扉にもたれかかりつつ体を起き上がらせる。

「はあ・はあ・いたたた」

「立てるか」

声をかけてきたのは、先ほど姿を消した仁科だった。

「あ・アンタ今の今まで」

怒りにも似たものをぶつけようと声を荒げたが、彼が引きずっているものに目をやった。

「誰？それ」

「さっきのやつの共犯者。あの空間の能力者なんです。迷路を作り出す能力で通常の空間とはちょっと感覚が異なるんです」

「そんな能力者がいたなんて」

「空間系能力者は相性が悪いんですよ。ちょっとしたキャパシティダウンみたいな物かな」

「へー……ってアンタ、あたしを囿にしてそいつを捕まえにいったの？」

「ま、まあそういうことになりますかねえ」

「あ、あ、アンタねえ……」

電撃を浴びせてやろうと発電したが、受けたダメージの痛みで顔を歪める。

「とりあえず手当てしましょう。それとこいつを一応ね」

「つつたく」

「白井さんの所へ行くついでにあの先生に診てもらいましょう」

「い、いいわよ。このくらいの傷なんてこ……つつ」

倒れそうになるのを仁科は左手を伸ばし、抱きかかえるように美琴を支える。

「囿にしています。あやまります」

慣れない男性との接触到顔を赤らめつつ、聞き取れない奇声を発しながら仁科の腕から逃れようとする。しかし力が入らないのと仁科の支える力が強いいため、引き離せない。

「あいつを倒すのには御坂さんが必要です。なのでまずは手当てを」

「わ、わかったわよ……いいから離して」

「ありがとう」

「病院についたらきちんと言明してもらいますからね」

美琴はものすごい目力で仁科をにらみつける。

「は、ははは」

ちよっと逃げ腰になりながらも美琴と共に病院へ向かった。

T7 迷宮案内（後書き）

いかがでしたでしょうか？久々に仁科をちょっとだけ活躍させて見ました。

次回は美琴さんが言うように、説明の回になるかと思えます。仁科の事をちょこっとずつ明かして参ります。

誤字等お気軽にコメントください。
感想もお待ちしてます

それでは8話でお会いしましょう

T 8 並行世界（前書き）

お待たせしましたあ

第8話開幕です。お楽しみください。

看護婦により消毒を終えた美琴は、計らいにより簡易的に包帯を巻かれた装いで黒子の病室へ入ってきた。体の痛みのあるものの体を起こせるようになった黒子は、制服に着替えベッドに腰をかけていた。その隣には初春、その前に椅子を並べ涙子と仁科が座っている。「お姉さま、大丈夫ですか?」

「大丈夫よー黒子の時より軽いつてさ。それよりもう動いて平気なの?」

ええ、と黒子はうなずいた。美琴は黒子の隣に腰をかけ仁科に視線を向ける。この事件の真相を知っているであろうその唯一の人物。全員の視線を一身に受け仁科は話し出した。

「少し長くなるが、これは俺のいる本来の世界の・・・ある計画が発端です」

「本来の?・・・計画?」

美琴の頭上にはてなが浮かぶ。それは黒子を除いた残りの二人も同じだった。「では、この間のお話はほんとなんですのね」

「黒子、あんたは知ってたの?」

「ええ、端的にはありませんが・・・」

「ああ、この間の話って」

涙子が思い出したように声を発した。仁科はそれに頷き話を進めた。「そう、俺はこの世界の本当の住人ではない。パラレルワールドって言えはわかりますか?」

「パラレル・・・映画とかでいう並行世界ってこと?」

美琴は訝しげに言った。

「そうです。本来は決して相反することないですが、こことは別次元軸上に存在する並行する世界が、俺の本来居る世界です」

「で、その話を信じるとしてどうしてあんたがこっちの世界に着てるわけ?」

「並行世界といいますが、完全に一致というわけではなくこちらの学園都市と俺のいた学園都市では多少科学力に差があります。あちらの世界の方が若干科学力が進んでいて、とある研究も進んでいきます」

「とある・・・研究？」

「ええ、とある周期でそれぞれの並行世界の壁がもつとも薄くなる時期があり、別の並行世界へ行くという研究が行われていました」
誰も聞いた事ない、想像上での存在と思っていた世界、四人とも言葉を発することも忘れていた。

「ですがその研究は科学者の間で二つに割れ、凍結派と推進派で対立していましたが、結局は凍結と言う事でこの研究は闇に葬られたはずでした。しかし推進派の中にいたものがこの研究をひそかに再開させました。それを知った凍結派は事態を解決すべくチームを結成し、俺のようにそれぞれの世界へ派遣をしているのです」

「そ、そんな話・・・すぐには信じられませんね」

初春の言葉に涙子は同意するように目を配らせる。それは黒子も美琴も同じで少し困惑した表情をしていた。

「まあ、それだけならば密かに探し出しあちらへ送り返せばいいのですが、問題はここからです」

「問題？」

「能力者誘拐の事ですわね」

「そう、少ない推進派で対抗するためにある装置を開発したのです」

「ある装置・・・というのはなんですか？」

「能力開発をしていない者でも複数の能力が使えるようにする装置」

「それって」

「ええ、御坂さんは体感したでしょう。レベルアップ幻想御手事件の首謀者、木

やま山 はるみ春生が実際に使用した・・・」

マルチスキル「多才能力！！」

美琴、黒子、初春は合致したように声を八もらせた。涙子は知らないため、三人の八モリにもきよとんとしていた。

「あ、あのーわたし飲物買ってきますね」

話についていけなくなっただのか、それともレベル0の自分には遠い話と感じたのか、それとも気を使ったのか、そう言った涙子を仁科は引き止めた。

「いえ、こちらの世界が巻き込まれている事を佐天さんも知っておいてください。ここにいるのは・・俺が頼れる唯一の仲間・・ですから」

その言葉を聞いた涙子は上げた腰をおろした。

「多才能力マルチスキルを使うため、別の世界から能力者を連れてくるという目的のため、そして次元の壁がもつとも薄くなる周期がもうすぐなので、やつらも活発に動き始めたのでしょ

う」ということは、湾内わんないさんはそのために誘拐されたって事か」腕組をしている美琴の指に力が入る。

「はい。ですが・・・今回の一番の目的は・・・」

仁科は視線を美琴へ向けた。

「御坂さん・・・あなたです」

「あ、あたし？なんでまた」

「レベル5だからでしょうか」

初春の問いに肯定とも否定ともせず少し悲しそう表情で視線をさげた。

「それもありますか・・・」

「それなら、アンタの世界のあたしを捕まえたらいいんじゃないの？」

美琴のもつともな回答に、仁科は首を振った。

「それはできません」

「なんでよ」

「俺の世界では・・・御坂さん、あなたは死んでいるからです」

その言葉にその場に居た四人は出す言葉を失った。

T 8 並行世界（後書き）

いかがでしたか？この作品のタイトルから、なんとなく想像ついていたでしょうか？

最後に一応サプライズと言っつか爆弾と言っつか、衝撃的な展開を起こして見ました。

この8話で一章が終了って感じになります。

次回9話から仁科の話になります。

ではまた9話でお会いしましょう

T9 仁科の世界・ファーストコンタクト（前書き）

皆さんのおかげで9話目です。

第2章ともうしましょうか。真打登場と申しましょうか。

最近婚后光子にハマってます。あんな女の子・・・かわいいですよ
ね。

T9 仁科の世界・ファーストコンタクト

「木原あ」

声を荒げた青年が407 KIHARAのプレートのある部屋のドアを勢いよく開け放つ。重厚な机の向こう側に座っている白髪の初老のに近づき胸ぐらを強引につかみ上げる。同じ白衣をきた二人は、先進教育局の研究者。しかしながら初老の老人はこの所長の木原きはら幻生げんせい。この青年は若いながらもネームプレートには主任の文字が書かれている。本来このような行為は組織にとって許されるものではない事を理解しているが、それでも抑えられない感情を木原に向けていた。

「どうしたのかね仁科君。おちつきたまえ」

「あなたは、私の弟を実験台にしていたんですね」

「何を言うんだい仁科君。君が弟さんの原因不明の症状を治したいと言うから、ここの最新設備を使い治療の糸口を見つけようとしていたんじゃないか」

「ええ、あなたのその言葉を信じていましたよ。ですがあなたの本当の目的を知ったからには、弟を・・・ここにいる子供たちをあなたから解放します」

その言葉を聞いた木原は穏やかな表情から、奇異と感じるようなくらい目を見開き目の前の青年を凝視する。

「仁科君・・・残念だよ・・・君には期待していたんだが・・・」

木原の白目が赤く変色していく。

「それが実験の結果ですか・・・」

「そうだよお仁科君。能力者の脳波を統一し、能力者の脳はネットワークを作り出す・・・私の研究のしていたプランの1つに過ぎないがね・・・ひっひっひ」

「あなたって人は」

「さらばだ・・・仁科君」

にやりと笑みを浮かべた木原。

ドン

あまりの衝撃と音で外で遊んでいた子供はおるか、職員まで地面に倒れこんだ。次に見たのは、先進教育局所長室から立ち上る炎と黒煙だった。

『ここ先進教育局の爆破事故から10年。この事故に関して、当時を知るコメンテーターの・・・』

リモコンでテレビの電源を切る。通っている高校の指定の制服、ブレザーを着てしわすれたネクタイをあわてて首に巻く。時計は家を出て居なければいけない時間をとくに過ぎていた。

「めんどくせえ・・・」

そう思いながらもサボったときの兄の顔と、言われるであろうお小言を想像し1つため息を吐く。

「いつてきまーす」

いつもどおり返事のない家の鍵を閉め、学校へ向かった。通学時間からだいぶ立っているため、学校へ向かう道ですれ違う学生やクラスメイトの姿はない。こちらに引越し、今の学校に通い始めてそんなに経ってはいないが、ここ第七学区の空気はなんだか好きになれそうな気がしていた。学校の校門から敷地内へ入ると、頭上から声が聞こえた。視線を上にと自分のクラスのベランダから男子が一人顔をのぞかせている。後ろに教員と思われる女性が立っているが、彼は気づいていないのだろう。丸めた教科書で頭を叩かれ慌てて振り向いて教室に入る彼。

「なにやっつてんだか」

半分あきれながら教室へ向かった。

「おーっす」

教室のドアを開けると先ほどの男子が声をかけてきた。

「大倉・・・あとで補習な」

「そんなあ・・・木山先生それはあんまりだ」

教室に笑いが走る。いつもクラスのムードメーカーの大倉。転校して来た時に一番最初に話しかけてきたのが彼だった。彼のおかげで仁科はこのクラスにすぐ馴染めたのは言うまでもない。

「おっす」

そういつて自分の席へ向かう。

「仁科君、今何時かしら？」

目じりの辺りがぴくぴくしているのを見逃さなかった。そうとう怒っているのだろうと仁科じゃなくても気づく。

「3限です。ごめんなさい」

「ごめんなさい・・・じゃない。あとで職員室来るように」

「げ・・・」

「あつはつは、ざまあみる」

「大倉あ・・・君もだ」

「げ」

大倉はオーバーなりアクションで木山に抗議をするも、それはあえなく却下された。

放課後こつてり絞られた二人はげっそりしながら下駄箱へ向かった。あたりはすっかり夕暮れで、校内はすっかり静かになっていた。

「仁科この後は？」

「ああ、前居たところでも風紀委員ジャッジメントに席を置いてたつてのは話したろ」

「エリート校の集まる18学区でやってたつてやつね」

「そうそう。なんか向こうの先輩がこつちの風紀委員ジャッジメントの人に、俺の事話したらしく今日挨拶に行かなきゃなのさ」

「まー気をつけてな。俺はこれからバイトさ」

「あーj o s e p h ・ s か」

Joseph・Sは大手チエーンのアミレスで、学生以外にもOLや家族ずれなど幅広い層に人気がある。第7学区の学生はよく利用している。

「今度食べに行くよ」

「ああ、じゃあな」

校門のところまで仁科と大倉は別れた。大倉は自転車通学のため駐輪場へと向かった。仁科は会う約束をしている風紀委員第一七七支部へと向かった。以前は柵川中学の一室に設けられたのだが、柵川中学以外の学生も通うため、それぞれが通いやすいようにそれぞれの学校へ均等の距離にあるビルの1テナントとして一部屋借りている。もちろん治安維持が目的のため、賃貸料などは学園都市持ちである。

「ここか」

風紀委員活動第一七七支部（JUDGMENT 177 BRANCH OFFICE）

プレートに矢印と2Fという文字が書かれている。それを確認し二階にある一七七支部のドアをノックした。どうぞ、と声が聞こえたためドアを開けた。

「失礼します」

「君が、仁科司君？」

セミロングの髪にメガネをかけた女性が出迎えてくれた。促されるまま中に案内される。そこにはツイントールの少女と花飾りを頭につけた少女が立っていた。少し離れた椅子に座っている黒髪の長い少女、窓際でサバサバしたオーラを放っている少女が仁科の方をみていた。

これが仁科と彼女たちの最初の出会いだった。

T9 仁科の世界・ファーストコンタクト（後書き）

これから仁科の世界での話を少し書きます。

次回で彼の能力を明かします。

まあ、文章やら設定やら支離滅裂になってますが、
とある台詞を言わせたいだけです。

では9話でお会いしましょうと、はやく9話目を公開したいという
思いを隠しながらゆーたんは投稿します。

T10 仁科の世界2・落ちこぼれの・・・(前書き)

じゃっじゃーん刮目せよ

と言っ感じで佐天赤マル急上昇中です

とりあえず本編をどうぞ

第一七七支部で仁科が活動するようになって2週間たったある日。

バンクに登録されているレベルよりも格段に能力が上がっている能力者が多数現れるようになった。それは噂大好きな涙子によれば、都市伝説の一つに幻想御手レベルアップと呼ばれるものがあるらしいとの事だった。にわかには信じがたいものではあったが、初春がネット上でそれらしい情報や掲示板を見つけた事により現実味を増した。それに前後するように起きた連続虚空爆破事件グラビトンによって、レベルアップの存在の核心に近づいていた。「はい、鎮圧完了」

仁科の周りにはボロボロになった男達が気絶していた。幻想御手レベルアップの情報を得るために、いろいろな所へ足を運んでいた。絡まれたりされたが、無能力者だったため難なく返り討ちにした所だった。服やズボンの汚れを払っていると携帯が鳴った。着信者の名前をみると白井黒子と表示されていた。

「はいはいこちらサボリの仁科です」

「なにアホな事言ってますの」

黒子はあきれた様に電話越しにため息を吐く。黒子は一瞬電話を切るうとも考えたが、結果だけを聞こうと思いい仁科との会話を続ける事にした。

「それより何かわかりましたか？」

「特になんも」

「そうですか」

「ただ・・・」

「ただ？」

「初春さんが見つけた掲示板が、取引に使われているのは間違いないかと」

「わかりましたわ。仁科さんはこのまま情報収集を続けてくださいな」

「うー」

そういつて電話を切った。やれやれと思いつつ休憩をしようと近くの Joseph's というファミレスへ入った。

「いらつしゃいませー」

店員がやってきた。店は夕方の時間帯で割りと席は埋まっていた。

「あれ？なんだ司か」

「大倉か」

このファミレスの制服を身にまとった大倉は、いつもよりも引き締まって見えた。

「あそこの窓際の席でいいだろ」

「おう」

そういつて窓際に設置された一人用の席へ案内された。適当にお勧めを聞いてそれを注文しておいた。

「それにしても次の身体検査システムスキャン楽しみだなー」

声を少し踊らせながら大倉の目はどこか別の世界へ飛んでいる。

「そうか？てかあんだけ嫌いだーって言ってんにどういふ変化だ？」

「ふっふっふ、男心とさんまの塩焼きってな」

「聞いたことねーよ」

いろいろ聞いておきたい所だったが、来客の為大倉はそちらへ行ってしまった。

その日は収穫がなさそうだったため、報告をするために第一七七支部へ仁科は戻ることにした。支部のドアの前に立つと中から黒子の声が聞こえてきた。

「それにしても固法先輩。このまま仁科さんを風紀委員シヤッジメントをさせてよろしいのでしょうか。彼、いまいちやる気といつか自覚が足らな

いと感じていますの」

黒子のその言葉を聞き、ドアノブにかけた手を離れた。同じような事を前にも言われていた・・・そんな記憶が甦った。

「あなたにはやる気が感じられない。どうしてお兄さんのようにできないの」

「お兄さんはとてもすばらしい功績をもってるわ。仁科さん・・・あなたも頑張ってる」

兄兄兄、どこへいっても優秀な兄と比べられそんな期待にこたえ様としていた司の心は、病んでしまっていた。どこへ行っても落ちこぼれ、能力レベルは2と診断されますます回りの目は厳しさと哀れみと蔑みで満ち溢れ、いつしかあきらめと言うことを覚えていた。

(兄さんとは違い落ちこぼれ・・・ドツベル・・・か)

そんな今の自分を嘲笑し、再びドアノブに手をかけて今度は話すことなくまわした。ガチャという音と共に入ってきた仁科を見た黒子はバツが悪そうに視線をはずしていた。

「ただいまもどりました」

そういつて空いているデスクの席へ腰をかけ、本日の活動報告をまとめる。簡単に言えばたった4文字・・・情報なしなのだが。

「とくにこれといった情報は得られませんでした。初春さんの調べた掲示板が怪しそうということくらいですね」

「もう少し調べてみますね」

と初春は複数モニタと端末のある席へ座り、操作し始めた。仁科は黒子に視線を向けた。黒子が風紀委員として誇りを持っていることは仁科にもわかってはいた。それだからこそ、自分の姿にはいらだちを隠せないという事もわかっていた。だからこそ何も言わず風紀委員の腕章をはずし、それを固法のいる机においた。

「仁科くん？」

「俺には・・・向いていないんです。勝手過ぎでごめんなさい」
「ちよ・・・」

仁科は自分の通学用の鞆を手にして、第一七七支部を後にした。

固法と黒子は目をあわせ、初春も心配そうにドアのほうへ視線を向けていた。

すっかり日も落ちた夜の都市。コンビニのビニール袋を片手に白い短髪で中性的な印象を受ける少年がコンビニから出てきた。それを見計らったかのようにぞろぞろとチンピラが少年を取り囲む。数秒後には全員が地に伏せ、少年はくだらないとばかりに、たいくつそうにその場から歩いていく。自宅のマンション付近までくると学生靴を持った同じく少年が視線の先に立っていた。

「一方通行・・・待ってた」

「アア？誰だオメエ」

そのまま一方通行は少年に歩み寄った。よく見れば自分と同じ年くらいの男だった。

「ちよつと付き合え」

「誰に命令してんだ誰に」

「今むしゃくしゃしてんだ、相手してくれよ」

「めんどくせエ」

めんどくさそうに一方通行は高加速し少年に詰め寄る。これが一方通行の能力。体表面に触れたあらゆるベクトル（向き）を任意に操作（変換）させる、絶対防御と絶対攻撃を兼ね備えた能力。そのまま蹴りだされた足にさらにベクトルを加える。その蹴りは運動量のベクトル操作により、通常の倍以上の威力を持っている。いつもは無意識かに絶対防御に当てているため、攻撃してきた相手にそのまま撥ね返るオートカウンターで相手を倒していく。しかしこの蹴りは自らの意思での攻撃のほか、高加速とさらにベクトルの変化を加えた蹴り。

ガッ・・・

相手のお腹へ直撃した蹴りは何事もなかったかのように、少年のお腹の位置でぴたりととまった。

「は？」

少年は振りかぶり拳を一方通行へ振り下ろす。ベクトルの操作で少年の攻撃はなんなくかわすが、一方通行は少し驚いていた。

ドン・・・

振り下ろされた拳、その先にあるアスファルトの道路がヒビをいれつつ地面へめり込んだ。

「やるじゃねエか」

蹴りを受け止めたことも驚いたが、それにプラスして少年の攻撃力、一方通行は少年に興味を抱きつつあった。それと一つ思い出した事が・・・

「オマエ・・・思い出したぞ。落ちこぼれのドツペルか・・・」

出そうと思つた言葉を飲み込み少年・・・仁科司は唇を強く噛んだ。

「ドツペルドツペルうるせえ。ドツペルがどんなもんか見せてやる」

「そうまでいうなら、サイッコーに楽しませてみせるよ」

笑い声を高らかにあげ、一方通行特有のベクトル操作により一般人ではありえないくらいの跳躍と機敏な動きをしながら仁科へ上空から攻撃を仕掛けてくる。ガードするでもなく一方通行の攻撃を頭で受けるもピクリとも動く事無く一方通行をにらみつけている。

「っつらあ」

そのまま一方通行へ右ハイキックで顔を狙うも特有のベクトルによりそのままはじき返される。体ごとふつとんだ仁科は受身を取り体勢を相手へ向ける。一方通行はなぜか楽しそうににやついている。

「ハッハッハ、場所を変えようじゃねエか」

そういつてついた先は空き地。マンション建設用のため資材等置かれていたが、戦うには十分な広さの場所。

「続き・・・いくぞオラア」

同じように何度か攻撃していくうちに、アクセラレータ一方通行は一つの仮説をたてた。

「オマエ・・・後手後手の戦い方だな。オマエの高い防御力もきつと能力・・・」

仁科はアクセラレータ一方通行の言葉をさえぎる様に攻撃を加える。アクセラレータ一方通行は確認するため全ての攻撃を受けず、ベクトル変化の高速移動でかわす。

「さっきの地面をへこますくらいの威力がある攻撃は、できねエようだな」

アクセラレータ一方通行が攻撃をしなくなってから、仁科の先ほどのような高威力な攻撃は鳴りを潜めていた。

「防御に関しては威力を吸収だとして、それを攻撃時に反射。そんな能力聞いたことねエな。それに吸収と反射だとすると、多重能力つてことになるが・・・。理論上不可能なはずだな」

「はあ・・・はあ・・・吸収と反射・・・たしかにお前の理論は正しい。だが・・・」

仁科は近くの小石を広いそれをアクセラレータ一方通行へ放り投げた。アクセラレータ一方通行は反射する事無くその変哲のない小石を受け取る。

「これがなんだ？」

仁科は何も言わず再度小石を放り投げた。

「・・・これは・・・」

何の変哲もないただの小石。しかしその小石は・・・、
「これが・・・オマエの」

その二つの小石はまったく同じ形をしていた。可能性としてはなくはない、だがまったく同じ形の小石の可能性はないに等しい。

「俺はバンク上ではレベル2の能力者。これは物体複写メタコピー」

「なるほど・・・コピーできるのは物体だけじゃねエってことか」

「そうさ、衝撃と能力もコピーできるのさ」

「とんだドツペルだな」

「俺の能力は、生物をコピーできない。それで上のやつらに言わせたら、とんだ欠陥品で言われたぜ。ドツペルゲンガーを作り出せない、俺は・・・落ちこぼれの欠陥複写能力者さ」

T10 仁科の世界2・落ちこぼれの・・・（後書き）

なんか中途半端というか、構成が浅いと言っかいきなりかよって感じですけど、

どうしても最後のドッペルのくだりを言いたいがために戦わせました。

というか司のバトルシーンをのを書きたかったのです。

ドッペルはドイツかどっかでダブるとか落第するって意味です。

仁科の世界なので原作やアニメとはまた異なる次元なので、性格が若干違ったりすると認識してもらえると嬉しいですよ

では11話でお会いしましょう

T11 仁科の世界3・心の夜明け（前書き）

では11話をお楽しみください。

T 11 仁科の世界3・心の夜明け

「まぶし」

薄めに差し込む眩い日差し。わりとすわり心地のよいソファの上で眠りについていたようだが、昨日の今日で体の痛みは甚大だった。テーブルを挟んだ反対側のソファには白い短髪を少し乱した一方通行アクセラレータが無防備な顔で眠っている。昨日の夜から空が明るくなるまでこのマンションの近くの空き地で、仁科と一方通行アクセラレータは死闘のようなケンカのようなとにかく空き地がぼこぼこになるまでただひたすらに仁科は一方通行アクセラレータにぶつかっていた。

「あー、無理。もー無理・・・限界」

そういつて仁科は仰向けに倒れこんだ。体にたくさんの酸素を送り込もうと、胸が肺が激しく上下する。

「もー限界・・・真っ白だ・・・」

そういいながらも、憑き物が落ちたようさっぱりとした表情をしていた。

「あんだア？てか、空がもう明るいじゃねエかクソつたれが」

そういつて仰向けに倒れている仁科の近くに腰を下ろした。

「ったく・・・これでもオレは優等生してんだ。完全に寝不足だぜ・・・」

そう呆れたように仁科を見下ろした。その視線に気づいた仁科はふっと笑ってしまった。

「噂に聞いていたような悪魔ってよりは、学校の事を気にするなんて」

悪いか、と一方通行アクセラレータはそっぽを向いた。

「とりあえずオレの部屋にこい」

「んあ？」

「というような事があり、今一方通行の部屋に一緒にいる。時計に目をやると10時40分」

「あ・あれー？・・・ぬあー完全に遅刻だああ」

「うるせエぞ」

あまりの騒音に強制的に目覚めさせられた一方通行は、手元に合った空き缶を仁科に投げつけた。

「だ、大遅刻だ・・・」

「まあしかたねエ・・・遅刻か・・・」

「あは、あははは」

「早くいくぞ」

「急ぎ二人で一方通行の部屋を出た。」

「オマエ・・・」

「司だ・・・」

「知ってるよ。オマエのアニキってのには世話になった事があるからな」

「そうなのか」

「仁科清貴にしなきよたかだろ。オレに関わった科学者の中でまともなやつの人だからなア」

「そっか」

「オマエの事は知らん。オレはオレで今までずっと実験対象とされてきた。それぞれいろんなもんがあるんだって事だな」

隣を歩く仁科は黙っていたが、かまわず話を続けた。

「だがそれが生まれてきた意味だとしても、ふて腐れてしかたねエ。だったら頂点に立ってすべてをひれ伏せさせるほうがよっぽど楽しいじゃネエか」

「そういった一方通行はこれ以上ないと言うほど冷たい笑みを浮かべていた。こんなやつと昨日やりあったのかと思うと、仁科の背筋に悪寒が走った。」

「できる事をやってりゃ、ちゃんと理解してくれるやつが・・・おつとしゃべりすぎだな」

「・・・オレよりちゃんとしてんだな」

無意識に仁科の口から漏れた言葉。

「ほら、オメエはそつちだろうが・・・じゃあな」

上げた掌をひらひらさせ一方通行は背を向けて歩いて言った。アクセラレータ

「まア、オメエはオレが興味を持った、三人目の・・・人間だからな」

その言葉は仁科には聞こえる事はないが、一方通行は満足げにつぶやいた。しばらく歩いた所にあるベンチに座っていた茶色い髪の少女は、一方通行を見つけると、彼の隣に走りより彼のかばんに抱きついた。アクセラレータ

「今の俺にできること・・・か。理解してくれる人か・・・」

少しでもその場で立ち止まっていた仁科は、決意をしたように一方通行とは別の方向へ歩き出した。そして携帯を取り出し電話帳に登録されている番号に電話をかけた。アクセラレータ

「はい、もしもし」

「あ、固法さんですか・・・に・・・仁科です」

その日の夕方、夕方と言ってもまだ夕日までには割り時間がある。そんな時間帯。仁科は第一七七支部へ戻りみんなに謝罪をした。た。

「1日で戻ってくるとは・・・単純ですこと」
そう言つて黒子は少し呆れたような顔をした。

「ふふ、一番心配してたの白井さんなのに」

「そうですよ。あの後すごく『少し言いすぎましたかしら』って心配そうに」

「うーいーはーるー」

「し、白井さん怖いです」

「みんなごめん。いろいろモヤモヤしてて・・・それでこっちに転校したり逃げてばかりで・・・でも逃げずに受け止める。俺は俺、第一七七支部の一員としてやるべき事をやる」

「ええ、改めてよろしくね仁科君」

「頑張りましょう」

「ま、これからのあなたに期待しますわ」

そしていつものようにここに、涙子や美琴がやってきていつも通りのにぎやかな日常が続く・・・はずだった。

T 1 1 仁科の世界3・心の夜明け（後書き）

10話と同じように原作キャラぶち壊れてます。

でもそれは並行世界と云うことで許してください。

まじめに学校に行く一方通行もいいものです（笑）

では12話でお会いしましょう。

T 1 2 仁科の世界 4・原因不明（前書き）

お待たせしました12話です。

仁科の世界の話はここから加速度的に進んでいきます。

たぶん・・・

それでは本編どうぞ

T 12 仁科の世界4・原因不明

仁科が第一七七支部で新たな決意を表明して数日、世間を騒がせていた連続虚空爆破事件は解決へと向かった。介旅かいたび初矢はつやという男子学生が、風紀委員ジャッジメントへの逆恨みで起こしたと言うことを、白井の口から告げられた。

「ちいーっす。遅れましたー」

特に時間等の厳密な規則はないのだが、仁科が来る頃には固法や他メンバーがいることが多いため、遅れたと思う癖がついてしまった。今日に限っては事務所には固法しかいなかったが。「仁科君お疲れ様」

作業していた手を止め顔を入り口の方へ顔を向けた。

「あれ？白井さん達は？」

いつも自分よりも先にいるいつもの二人が、今日に限っては事務所に姿はない。

「ああ、それがね・・・」

固法は先ほど合った白井からの電話の内容を仁科に伝えた。

「初春さんが風邪ですかー、じゃあ今日の警邏は俺が変わりに行きますね」

「ほんとに？そうしてくれると助かるわ」

「行ってきます。何かあれば携帯に」

そう言つて盾マークと緑のラインが入った風紀委員腕章をつけて、外へと向かった。外は蒸し暑くワイシャツをバタバタと仰ぎ、風を服の中へと送り込む。

「そうは言っただけど・・・今日は警邏当番じゃないからウキウキっ

て思ってたのに」

ぶつぶつと端から見たらなにか呪文を唱えているように見えるように、陰湿なオーラを放ちつつ決まりのないルートを歩く。

「あとでぜっりたいあの白井黒子に何かおごらせるぞ・・・」

と密かな企みに不気味な笑いを浮かべつつ歩いていると、背後から呼ぶ男女の声が聞こえた。声のした方へ振り向くと見慣れたクラスメイトとカチューシャをつけた他校の制服を着た女の子がこちらへ走ってきていた。

「よー仁科」

見慣れたクラスメイト、大倉が軽く手を上げる。

「大倉か、女の子を連れているとはいいいご身分だな」

冷やかな視線を大倉へ送るも、にやりと笑いするりとかわす。

「この間入ったバイト先の子なんだよ」

「どうも、仁科です」

大倉へ向けた表情から一変し、仁科なりの爽やかな笑顔を作った。女の子を良く見ると、肩にとどきそうな髪、前髪をカチューシャで上げているため、おでこ全開でそのせいかものすごく元気がよさそうな印象を受けた。

「に・・・しな？・・・ねえ、下のお名前は？」

「司だよ。つか・か・さ」

それを聞いた女の子はぐいっと顔を、つかさの顔に近づける。突然のそれに仁科は一步後ずさった。

「な、なにか？」

こんなにも接近されたことがないため、一瞬だが頭が真っ白になったり、心なしが顔が熱くなったり戸惑った。

「やっぱりー。司ちゃんだー」

「え？え？」

いきなりの名前をちゃんづけで呼ばれ、いったい何かと困惑している司に冷やかな視線が刺さる。その視線に気づき顔を向けると、にやりといいものを見たと言わんばかりの大倉の顔がそこに合った。

まずいという心情の仁科をよそに、その女の子は嬉しそうに仁科の手をつかみ上下にぶんぶんふりまわす。

「あ、あのー。君は……」

「ええ。覚えてない？」

「??？」

困惑する仁科に彼女は続けた。

「あたしよ、えださき。枝先^{えださき}絆理^{ばんり}」

「あ……」

覚えのある名前。言われたらそのカチューシャで前髪をあげてスタイル。そしてあいまいだが口にするのも、思い出すのも辛いある時期に知り合った女の子。

「先進教育局で中学入学まで一緒だったでしょ」

先進教育局・ある異常な研究者によって子供を非人道的実験をしていた施設。爆破事件後はその研究者の消息は不明となり、別の者が後任をついだ。

「仁科先生にもこの間会ったら、司ちゃんがこっちに引越したって聞いたんだよ」

その後任こそが仁科清貴、司の兄である。司にしたら優秀すぎる兄は目の上のたんこぶみたいなもので、周りからの期待や言葉に重荷に感じていた原因であった。

「兄さんに会ったのか。俺には絆理^{ばんり}がこっちにいるの教えなかったくせに」

「ふふふ。って大倉さん、時間が」

時計に目をやった大倉も慌てだした。

「やばい。じゃーな仁科……枝先に昔の事……おしえてもらおうからー」

そういつて走り去っていく。

「今度、司ちゃんちに遊びに行くねー」

手を振りながら大倉の後を追って行った。

「……って、あの野郎……住所まで教えてたのか」

ここにはいない目の上のたんこぶにふつつつと怒りを覚えつつ、二人の背中を見送った。

その頃、美琴と黒子は水穂機構病院へ来ていた。連続虚空爆破事件ケラヒトを起こした介旅初矢かいたび はつやが警備員アンチスキルの取調べ中に意識不明になったため、搬送されたこの病院へ来ていた。介旅初矢かいたび はつやの病室へ向かうと、ドアの前で医師と思われるメガネをかけた男性と看護婦が話をしていた。二人に気づいたように視線を投げかける。

「風紀委員ジャッジメントの白井です。介旅初矢かいたび はつやの容態は？」

右上につけた腕章を見せながら、医師に伺った。

「最善をつくしていますが・・・今の所意識が戻る様子は」

「あー」

申し訳なさそうに小さく手を上げた美琴。

「わたしこの間、そいつの顔を思いつきりブン殴っちゃったんですけど」

「いえ、頭部に損傷はありませんでした。・・・というか彼の体には異常がないんですよ」

医師はカルテらしきものに目をやる。

「意識だけがない状態です」

「原因不明・・・というわけですね」

「ええ。ただ・・・」

「ただ？」

「同じような患者が今週に入って次々と運ばれて着ていて」

医師はそう言っつて、患者の資料を二人に提示した。そこには美琴と黒子が関わった事件の犯人と思われる人物の名前があった。それを確認し二人は目を合わせ頷く。

「情けない話ですが・・・当院の設備とスタッフの手に余る事態です

ので」

医師は肩を落とした。

「ですので、外部から大脳生理学の専門家をお呼びしました」
カツカツとヒールの音を廊下に響かせ、こちらに近づいて来る一つの人影。

「おまたせしました」

前日の停電の影響で薄暗い廊下、美琴達がいる場所は窓から差し込む光があるため、廊下が暗くはつきりとした容姿は見えにくい。美琴達に近づくとつれ光の割合が増え、ようやくヒール音を鳴らしていた女性の容姿が見えてくる。紫色のスーツに白衣を纏い、ロングヘアの髪を頭の後ろでまとめられている。

「水穂機構病院院長から招聘を受けました、テレスティーナ・ライ
フラインです」

その数日後、佐天涙子が幻想御手レベルアップの影響で昏睡したと、初春から聞いた黒子から仁科に連絡が入った。

T12 仁科の世界4・原因不明（後書き）

いかがでしたでしょうか。

アニメ版で一番好きなレベルアップの章の開幕です。

もちろん木山先生は教員ですので関わっていません。

そしてこのテレステーナさん・・・次回以降から
きっと楽しませてくれると思います

それでは13話で会いましょう

T13 仁科の世界5・脳波ネットワーク(前書き)

2クール目開始です。

仁科たちを巻き込み加速度的に動き出します。

では本編をどうぞー

T 13 仁科の世界5・脳波ネットワーク

佐天さんが倒れた？白井さんどういう？」

「詳しくはわかりませんが、初春から連絡がありましたの」

その後2、3言交わし通話を切った。幻想御手^{レベルアップ}についての情報収集を続けていた仁科だったが、黒子からの電話で幻想御手の正体^{レベルアップ}が音楽ファイルと教えられた。現在その解析のため、大脳生理学の専門家のテレステイナーナという女性の所へ、幻想御手^{レベルアップ}を届けに初春が向かっていることも。。。

（佐天さん・幻想御手^{レベルアップ}を・・・まあ、気持ちはわかるけど）

自分より優れたものがある、強い者がいる、それを追い越せるもしくは近づけるのなら、誰でもその甘い誘惑に勝てる者は少ない、ましてや自分が低いと劣等感を感じているものならなおさらだな、と仁科は考えつつ一度支部へ戻るにした。

「特定の人物の脳はパターンがはっきりしてるなら・・・」

美琴はPCを操作している黒子の横で画面を確認する。

「ただいまーって何してるんです？」

巡回から帰ってきた仁科はPCで何かをしている二人に話しかける。

「おかえんなさい」

美琴は視線はモニタを見たまま、声だけで仁科を出迎えた。あちちと事務所内の冷蔵庫から麦茶が入っている容器をとりだし、仁科はそれをコップに注いだ。

「幻想御手^{レベルアップ}を使用して昏睡状態に陥った患者の脳波が、全員同じパターンで事がわかったのよ」

「脳波が同じ・・・ですか」

麦茶を飲みつつ二人へ近づきモニタを眺める。

「脳波パターンがはっきりしてますので、初春にバンクのデータを検索してもらえ・・・ば」

黒子はカタカタとキーボード操作し、必要な情報とページを表示さ

せていく。しかし何か気づいたように表情が一変する。

「って肝心の初春がないんですの」

「たしかどっかのなんちゃらの人に」

仁科は先ほどの通話を思い出す。

「大脳生理学の先生ですわ」

呆れ顔で黒子が補足する。

「いったい何の騒ぎ？」

事務所の奥から固法がやってきた。事情を説明すると・・・

「そう言うことならバンクへのアクセスは認められるでしょうね」

そう言うって固法は自分のデスクのPCからバンクへのアクセスを開始する。バンクのデータには各個人の脳波パターンもすべて保存されておあり、能力開発を受けた学生はもちろん、職業適性テストや病院の受診を受けた大人のデータもすべて保存されている。

「でもなんで幻想御手レベルアップを使うと同一人物の脳波が組み込まれるのかな」

「能力者のレベルがあがるなんてさっぱりわかりませんわ」

それぞれ違う個人、能力者にも差がありとすっかり迷宮入りしそうな二人をよそに、固法はある事に気づく。

「これってネットワークと同じなんじゃないかしら？」

「ネットワーク？」

「ええ。パソコンはそれぞれOSや使ってる言語も違っていわ。でもネットワークが作られるのは・・・」

「プロトコル・・・ですわね」

「そう。プロトコルがあるからネットワークが形成される。つまり・・・」

「特定の人物の脳波パターンがプロトコルってことか」

「おそらくは」

そういつて固法は最後にエンターキーで検索を開始させた。

「複数の能力者の脳を使って処理能力を上げる。さらに同系統の能力者同士なら、効率よく能力を扱えるようになる。」

あごに手を当てたまま美琴は推察する。それに固法は同意した。

「黒子、テレステイナ先生の所へ行こう」

「この情報をもっていけば、なにか解決の糸口が見つかるかも知れませんがね」

そう言つて二人は事務所を飛び出して言った。固法が止めるまもなく……。二人だけになつた事務所で仁科は二人の変わりに考察を再会する。

「つまり、今昏睡している患者達は……」

「きつとネットワークのために脳をすべて使われているから、昏睡して……つてたわ」

画面上には一致率99%の文字が表示されている。その人物の情報を確認するためクリックすると、そこに表示されたのは二人の人物である。

「これって……」

仁科と固法は息を呑んだ。初春が幻想御手レベルアップをもつていき、先ほど美琴と黒子が会いに行く toward 大脳生理学の専門家、テレステイナが映っていた。

「脳波パターンは個人個人それぞれ違うはずじゃあ……」

もう一人のデータを閲覧するそこに映し出されたのは白髪の初老の人物。それを見た瞬間、仁科の視線は凍りついた。

「木原……幻生げんせい」

その言葉に固法が振り向く。

「仁科君、この人知ってるの？」

その問いに固まった口を無理やりこじ開け、声を絞り出した。

「人体実験狂いの……狂科学者マッドサイエンティスト」

「狂科学者……」

「こいつとテレステイナの脳波がなぜ？」

「そんなことより三人が……」

「俺追いかけます」

「わかつたわ、私は警備員アンチスキル連絡を。仁科君……気をつけて」

その言葉に頷き、仁科は二人の後を追った。

T13 仁科の世界5・脳波ネットワーク（後書き）

どうでしたでしょうか？

だんだん全貌が見え隠れしてきてますが、

俺の大好きな幻想御手編です。

次回は美琴と黒子がテレステイナーナへ会いに行く話です。

ご意見・ご感想等頂ければうれしいです

では14話で会いましょう

T14 仁科の世界6・微笑みの悪意(前書き)

さあ、ここから仁科の世界最終章です(笑)

本編をどうぞ

T 1 4 仁科の世界 6・微笑みの悪意

「うふふふ」

ソファに横たわる初春を見下ろし、下卑た笑みを浮かべ手元の資料に視線を落とす。

「レベル1・・・低能力者か」

まあいい、と資料をめくる。

「空間移動能力者、発電系電撃能力者」

捲られた資料には、白井黒子と御坂美琴の写真が載っていた。目を通した後乱雑に資料が閉じられたファイルを、机の上に放り投げる。再び初春に目をやると、頬には涙の後が残っていた。ここへ駆け込んできたときは、目も顔も真っ赤にして親友を助けたいんだと、すごい勢いだったことを思い返す。だがそんなことにはさらさら興味はないのか、すぐに行動を開始する。やがて来るであろう者たちへの準備を・・・。ふと室内の壁にかけられた鏡に映る自分が見えた。整った顔立ちにプロポーション、紫のスーツが良く似合っている。だが気に入らなかったのか、手元にあった分厚い本を鏡に投げつけた。粉々に砕け散った鏡だった残骸は、床に散乱していた。ものすごい音に驚き、初春は目を開けた。

「な、なにかあったんですか？」

散乱した鏡をみて目の前の女性に話しかけた。

「なんでもないので。手元がすべて・・・ね」

「は、はあ」

「それよりも、ちょっと移動しましょう」

そっいつて彼女は初春に近づいた。

「え？でも解析け・・・」

初春の言葉をさえぎる様に、彼女はスプレーを初春に向けて噴射する。

「え？テレ・・・ス・・・な・・・」

「ふふふ、起きられてると面倒だから」
そういつて初春を抱きかかえ部屋を後にした。

初春を追ってテレスティーナの研究所へ来た美琴と黒子は、タクシ
ーの運転手とのやりとりもそこに建物内へ入る。目に入ってきた
たのは異質な感覚。廊下の電気はおるか人の気配さえも感じられな
い。あるのはただひたすら無音な空間。

「黒子、ほんとにここ」

「恐らく・・・たぶん・・・間違いないと思うのですが」

質問しようにも人が誰もいないのではと思いつつ、廊下の奥へと進
んでいく。空調も聞いていないため、じつとりと肌につくような蒸
し暑さが二人を包む。ここであっているのか、半信半疑になりなが
らも奥へと進む。

「こうなったら手分けして捜すわよ」

「わかりましたわ。私はこちらを」

「わかった、何かあったら連絡して」

そういつて二手に別れた。黒子は空間移動テレポートを使いながら徐々に上へ
と向かっていく。

「4階・・・ここが一番上の階ですわね」

奥へと進むとそこには扉が開きかけた部屋が1つ。

(所長室・・・ここが)

中を除くと人影は見えなかったが、散乱した鏡を発見した。

(いったい何が・・・)

部屋を物色していると、外から車の鍵を開ける機械音が聞こえた。
窓から外をのぞくと初春を担いだ女性が、車の後部座席に初春を乗
せている姿が確認できた。

「初春」

一瞬で外の車の位置まで空間移動し、初春を乗せた女性へ詰め寄る。
「あゝら、見つかったちゃった。案外早かったのねえ」

「初春に何をしましたの」
声を荒げる黒子に対し、彼女は飄々と話す。

「別に。まだ何も」
「テレスティーナ先生、あなたはいつたい・・う」

背後から後頭部への強い衝撃、意識と力がするりと抜けつつぶせに黒子は倒れた。

「油断・・しちゃだめよ、うふふふ」

そういつてテレスティーナは初春にしたように、黒子に手錠と目隠しそしてヘッドホンをつけ、初春の反対側の後部座席に乗せ自分は運転席へまわる。

「黒子！！」

この建物に来てたもう一人の人物、駐車場への入り口から勢いよく美琴が飛び出してきた。

「はい、遅かったわね」

何もなかったようにテレスティーナは微笑む。

「あんた、黒子と初春さんを返しなさい」

「もう遅いわ」

そういつて美琴のほうへ小さなパチンコ玉くらいの大きさの物を投げた。

「さようなら、御坂美琴さん」

重力子を急速に加速が始まる。

「これって連続虚空爆破・・」

ドーンと大きな爆発音と衝撃をすでに走りだしていた車の後方で感じながら、バックミラーを確認する。立ち込める砂煙を確認し、醜い笑みを浮かべアクセルを踏み込んだ。

「くっそ」

美琴はすぐにカエルの形の携帯を取り出し電話をかけた。

「御坂さん今どこに・・」

「黒子と初春さんが連れてかれた」

「え？」

「アタシはテレスティーナを追いかける。仁科、あんたはアンチスキルへ連絡を」

「わかった。俺もそっちへ向かう」

「だめよ。レベル2のあんたじゃ」

ジャッジメント

「白井さんに初春さんは、風紀委員の先輩で・仲間だ。だから」

「ふう、わかった。早く来なさいよ。遅いとあたしが全部片付けるから」

電話を切った美琴はすぐにタクシーを捕まえ、テレスティーナを追った。

「仁科君。初春さんを乗せた車は、今高速を走ってるわ」

「高速の封鎖は？」

「アンチスキルに連絡はしてあるから、彼らがしてくれてると思うわ」

「わかりました。俺も現場へ向かいます」

「頼んだわよ」

電話を切った仁科は、美琴と同じようにタクシーへ乗り込み行き先を告げた。

T14 仁科の世界6・微笑みの悪意（後書き）

テレステイナーの怪しい感じが出てたでしょうか？

次話でテレステイナーと美琴がぶつかります。

俺の大好きなテレステイナーの、異常性を出せたらと思います。

では15話でお会いしましょう。

T15 仁科の世界7・多才の片鱗(前書き)

お待たせしました15話です。

今回はみなさんお待ちかねの・・・あ、待ってないって？

取り合えず本編をどうぞー

司が美琴たちの所へ辿り着いた時には、砂煙が上がり高速道路の一部分がごっそり抜け落ちていた。タクシーの運転手にお金を払うのと同時にすぐにこの場から逃げた方がいいことを告げ、司は走り出した。砂煙の向こうに美琴らしき姿を見かけたが、それ以外の人がいないことに気づき、黒子と初春の安否を確認するため、とりあえず階段を使って上に登ることにした。階段を登るにつれ下の様子のはつきりと見えてくる。美琴と対峙する紫色のスーツの女、テレスティーナは美琴に向かって何か話している様子だった。美琴も司に気づいていないらしく、殺気だった彼女はビリビリと帯電している。

「いい実験サンプル素材が手に入った・・・あとはレベル5」
踏み込んだアクセルに反応するように車はどんどん加速していく。スポーツ車ではなくちよっと高めの乗用車なのだが、改造してあるのかスポーツ車並の加速でほかの車をどんどんごぼう抜きにしている。

「まだかしら・・・それともあきらめちゃ・・・」
そういつてルームミラーで後ろを確認すると、1台も車が映っていないのを確認し退屈そうにアクセルを少し緩めた。

「がっかり。拍子抜け・・・」
そう思ったテレスティーナだが、ある事に気がつき舌打ちをした。反対車線も含め自分以外の車が一台走っていない。

「思ったより上の連中もだめね・・・」
そして前方に道をふさぐように人と車が並んでいる。学園都市に住

むものにとつては見慣れた・・・

「警備員か・・・圧力をかけたはずだが・・・」
アンチスキル

ゆっくりとブレーキを踏み、警備員と距離を置いたところで車を停車させた。
アンチスキル

「テレスティーナ・ライフラインだな。無駄な抵抗はやめて速やかに車から降りろ」

長い紺色の髪をうろで一つに纏めた女性が、メガホン越しに言い放つ。前方に並んでいる隊員が銃を構えその前には円筒形の警備ロボットも並んでいる。

「やれやれ」

テレスティーナは言われたとおり車からおり、指示されたように頭の後ろに両手を合わせる。

「確保じゃん」

見た感じは武器もないただの女性のテレスティーナに対し、隊員達は最新の注意を払いじりじりとこちらへやってくる。それにイライラしてきたテレスティーナは頭の後ろにあわせていた両手を降ろす。

「イライラせんない」

右手を左に薙ぎ払う。と同時に起きた突風により前進してきた隊員たちを後ろへ吹き飛ばす。

「な・・・」

「つまらないから性能テスト・・・させてもらうわね」

緑色の蛙デザインのお気に入りの携帯が鳴った。影響画面には固法の名前が表示されている。

「もしもし御坂です」

「あ、御坂さん。今どこ？」

「今テレスティーナを追いかけているところです」

「そう、状況は仁科君から聞いているわ。そんなことより・・・」
いつもより少し早口になっている固法は、今見ている監視映像の状況を伝えた。

「テレスティーナが能力者？」

「ええ、能力開発を受けた実績はないけれど、明らかにこれは」

車内でも大きく聞こえた爆発音と衝撃、運転手は慌ててブレーキを踏んだ。

「もしもし・・・どうしたの？」

「いえ、ちょうど現場につきました。あ、運転手さんこれ・・・おつりはいいから早く逃げてくださいね」

そういつてお金を払うと運転手の戸惑いの声をあげたが、美琴は気にせず近くにある非常階段へと向かった。

「でも気をつけて。彼女・・・複数の能力を使うわ」

「ふ、複数つて・・・そんな・・・能力は一人に一つなはずじゃあ」
能力開発によつて、超能力を得た人は脳で演算を行い能力を使用するため、理論上能力は一人に一つまでとされてきている。

「ええ、でも彼女はもしかしたら幻の能力・・・デュアルスキル多重能力なのかも」
その後二言三言かわし電話を切った美琴が見たのは全滅している警備員と、ジャ何事もなかったかのように平然と立っているテレスティーナの姿であった。

「遅かったわね・・・レベル5・・・ふっふっふ。御坂美琴さん」

ゆっくりと美琴のほうへ振り向いたテレスティーナは、狂喜とも歓喜にも似た不気味な笑みを浮かべている。その表情に悪寒を感じた美琴は、後ずさりしたい衝動を抑えつつ彼女を正面から捉える。

「あたしの友達を・・・返して貰うわよ」

バリバリと帯電し睨み付ける。それに動じる事無くテレスティーナは軽口を叩く。

「そんなに怒らなくても・・・その子達と同じように・・・あなたも実験対象なんだからさあ」

爆発音を鳴らしアスファルトを砕きながら、ハイヒールとは思えな

いほどの高速移動で、美琴の右側へ詰め寄る。テレスティーナの突き出した右手を体を反転させてよけつつ、流れるような動きで足を垂直に上げ振り下ろされる踵を、横へ飛び退く。振り下ろされた場所にはヒールのピンが突き刺さっている。

（ど、どんなヒールはいてんのよ）

内心そんな事を感じつつ、洗練された相手の動きに避けるのがやつとだった。テレスティーナは乱れた髪を手で耳にかけつく、ゆがんだ笑みを美琴へ向けた。

「た、楽しませてくれそーね・・・あなたは」

そういつて前髪から電撃を放出させ美琴の反撃を開始する・・・はずであったが、テレスティーナは冷静に足をアスファルトを踏む。カツという音の後にテレスティーナの目の前のアスファルトが盛り上がる。衝撃音と共に立ちふさがったアスファルトは粉々に砕け散ったが、そこにテレスティーナの姿はなく美琴は見失う。

「それでおしまい？」

背後から聞こえた声の主に、振り向く事無く前方へ蹴り飛ばされ、うつぶせに体を地面にこすりつけた。

「くっ」

膝に手をつき、立ち上がった美琴は振り向きながら電撃を放つ。

「無駄よ」

そういつたテレスティーナの周囲を黒い半球体が多い、雷を絶縁遮断する。

「な・・・誘電力場？」

「ふふ、どうしたの？それで終わりなのかしら？」

「くっ」

「複数の能力を同時に使えば、あなたの電撃なんて・・・。ふふふふふ」

愉悦に浸る表情で己が力を語る。絶対の自信と経験と応用力、すべてが御坂美琴の経験値を上回る。

「こーんなのはどう？」

足元から自身を中心に円方向への衝撃を放つ。直後ひび割れた道路が波を打ちながら崩れ落ちる。美琴はバランスをとりながらミニのブリッツスカートから短パンを覗かせつつ降下する。テレスティーナは地面に着地する瞬間に、重力を無視するかのようにふわりと着地する。

「あら、それ・・・おもしろいわね」

美琴は両足から電流を流し高速道路の足の部分に吸い付く。戦いの場がどちらになるかと、テレスティーナの優位に変わらない。

「ずいぶん余裕ね・・・」

「ふっふっふ」

笑いながらも冷たく鋭い視線で美琴を刺す。

「まだまだ・・・これからあ」

電磁力の力で吸い寄せた瓦礫を投げ飛ばす。間髪いれず大小とわずテレスティーナへ向ける。

「くだんねえ攻撃してんじゃねえ」

荒々しい口調に歪んだ表情、右手に集めた粒子を棒状に固めた白銀光のそれで、瓦礫を粉々に破壊して行く。

「はあああ」

美琴は地面に降り、テレスティーナに向けて突き出した右手に、電気をため狙いを定める。テレスティーナが瓦礫を破壊した際の粉塵で視界が悪い。

「どこ見てるのかしら？」

「また」

気づけば背後にまわるテレスティーナの動きに反応できないが、変わりに溜めた電撃を全身から放電させる。

バチイイという音と共に、テレスティーナはすかさず美琴から距離をあげる。足からの爆発的な衝撃で、美琴が放電した電撃よりも早く遠ざかった。

「あら、すこーしはできるようね」

「なめんじゃないわよ」

「ふふふふ。これからあなたの無力っぷりを・・・感じさせて、アゲル」

その言葉と同時に美琴へ向けて手を仰ぐ。仰ぐ回数が増すたびに美琴へ届く風の力が強くなっていく。

「う・・・こんな風であたしが」

向かってくる風に目を細めながらも、相手から視線をはずさない。

ただ不気味なのはテレスティーナの後方から無数に伸びた土の蔦。どンドン長さを増しつつ、上へと伸びていく。

「なにを・・・」

「ふふふ」

伸びていく蔦はすでに高速道路の高さまで到達し、先端を道路に乗せる。

「あなた・・・上を見て御覧なさい」

「上？」

見上げたそこには蔦が絡まった一台の車が。

「な・・・それ・・・」

「んふふ。わかったかしら？私の車よ」

「まさか」

美琴が想像した最悪の事態は、この後テレスティーナが想像を現実へと変えた。

「ひゃーっはははは。ほーら飛んでけー」

「やめ」

車に絡んだ蔦を人間の手のようにしならせ、車を放り投げる。くるくると回転させながら高速道路の高さと投力と重量と重力に引かれ、加速しながら飛んで行く。

「黒子・・・初春さん・・・」

鈍い音を鳴らし、車体の形を粘土のように変形していく。そして激しい衝撃音と共に黒煙をあげ炎に包まれる。

「ひゃーっひゃはははは。無力・・・オマエは無力なんだよー」

「・・・ろ・・・」

「おい、さっきの勢いはドーシタ？その程度かー？ひゃーはっひゃ
っは」

「くるこーいーいー」

美琴の悲痛の叫びは目から流れる雫と共に、爆音は絶望へと誘い迎
え入れる。

T15 仁科の世界7・多才の片鱗（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ある意味サプライズ的にしてみました。

みなさんに少しでも、衝撃を与えられたなら幸いです

それでは過激に加速した仁科の過去編。

次回16話でお会いしましょう

T16 仁科の世界8・完全偽装（フェイク）（前書き）

前回のテレステイナーが、今回も活躍？

さてさて全開で黒子たちの乗った車を、

ばーいしたテレステイナーさんです（笑）

さて本編をどうぞ

鈍い音を鳴らし、車体の形が粘土のようにぐにやりと変形していく。そして激しい衝撃音と共に黒煙をあげ炎に包まれる。

「ひゃーっひゃはははは。無力・オマエは無力なんだよー」

「……ろ……」

「おい、さっきの勢いはドーシタ？その程度かー？ひゃーはひゃはは」

「くろこーいー」

美琴の悲痛の叫びは目から流れる雫と共に、爆音は絶望へと誘い迎え入れる。

ただ呆然と炎上する車を見つめる目は虚ろ、背後にはその姿をみて笑うテレステイナーが近づいてくる。

「黒子……初春さん……」

「レベル5もただの子供……まあ、これからは立派な実験対象……ふふふ」

空中を漂う水分を氷結化させ、周囲に無数の氷の塊を作り上げる。先端を尖らせた氷は、鋭利な凶器と化し狙い美琴へと定められた。

「殺しはしない……ただ、動けなくなるかもね。がひゃひゃひゃこりゃ傑作だ」

掌を美琴へ向けると同時に作りあげた氷の塊が美琴へ襲い掛かる。

失心の今の美琴は、それに気づく事無くただただ燃え上がる炎と黒煙を見つめ、心の中では自責の念がみずからを縛りつける。

「お姉様！」

その声と共に瞬間的にその場から美琴の姿が消え、氷は誰もいない地面へと突き刺さった。

美琴とその声の人物は先ほど美琴の位置の対角線上、テレステイナーの背後へと姿を移す。

「く……ろこ？」

「はい、私は無事ですわ。それよりお姉様お怪我は？」

失ったはずのその人物が目の前に、光を失った目は再び輝きを取り戻していく。

「黒子あんた・・・」

「ひゃーはははは」

死んだはずだった黒子を確認し、テレスティーナは高らかに笑い声を上げた。そして非常階段の方へ視線を向ける。美琴は崩れ落ちた高速道路の方へ目をやると、そこにはちよこんと顔をだした初春を確認した。

「よかった、二人とも無事で」

安堵からかさらに体の力が抜け倒れそうになる美琴を、黒子が両手で抱きとめる。黒子が生きている実感を感じ、美琴は目にたまった雫を気づかれないうように下へと流す。

「黒子」

「はい、お姉様」

美琴の手が強く黒子を抱きしめる。少し恥ずかしそうに顔を赤らめながら、やさしく黒子も抱きとめる。

「でもどうして・・・だって二人は」

「ええ、それは」

「そー言うことか・・・これは一杯食わされた・・・そうだろ？仁科君」

美琴とテレスティーナは非常階段へ登る司に気づいていないらしく、殺気だった美琴はビリビリと帯電している。非常階段を登るとボロボロになった警備員と1台の無傷の乗用車があった。

「大丈夫ですか」

負傷した隊員たちを警備員の車の近くに運んでいる隊長格と思われる女性に話しかける。

「一般人は危ないから早く非難するじゃん」

ものすごい剣幕で言われたが、こちらも目的があるため引き下がるわけには行かない。

「あの車に友人が乗っているんです」

そういつて司はその車へ近づくと後部座席には手錠とアイマスクにタオルを猿轡のように口にかまされている二人を発見した。しかし鍵が掛かっているのか扉が開かない。ガラスを割ろうとしたが、強化なのか特殊なガラスなのか、打撃ではヒビすら入らない。警備員アンチスキルに鍵を壊してもらおうと走り出した直後に、背後から伸びた土の蔦が、二人の乗る車に迫ってきていた。

「まずい・・・」

あわてて引き戻し司は車に触れる。車体のフォルム、材料、シャーシ、ギア、エンジン、内部構造、すべてが脳内で演算構築されていく。そして蔦に近づきすぎさま司の能力を発動させる。蔦と二人の乗る車の間に、全く同じ車を発現させる。それを掴んだ蔦はうまく絡みつき、持ち上げながら高速道路に空いた穴のほうへ車を持っていく。それを確認した司はひとまず警備員アンチスキルに鍵を壊すように依頼をした。鍵を突き抜けた銃弾は車体に丸い後を残した。そのまま後部座席から二人を下ろし、拘束を解いた。

「助かりましたわ」

「仁科さん、ありがとうございます」

その直後激しい音と共に黒くもくと黒煙が立ち上っていた。そして下卑た笑いが聞こえたため、仁科と黒子は目を合わせ下へと急いだ。「その子をお願いします」

そう言つて先に下へ向かった黒子のあとを追いかけた。

「仁科君・・・いるんだろ？」

非常階段から降りてきたのは呼ばれたとおり、右手に風紀委員の腕章をつけた仁科司が姿を見せる。いつもとは違い、強張らせた表情に鋭いめつきでテレステーナを睨む仁科に、美琴と黒子は違和感・因縁みたいなものを感じ取った。

「はじめまして・・・であってるか？」

「そうね・・・ふふふ。この姿でははじめまして・・・かしら」

美琴と戦っていた時と違い、外面な穏やかな口調でテレステーナは仁科を見つめる。

「ふふふ、でも君とはちゃんと向かい合わなければ失礼というものだね・・・仁科司君」

先ほどまでとは違い、低く少しくぐもった声を喉から発する。

「ふっふっふ」

回転式のパネルのように体全体を複数のパネルが覆っていたかのよう
うに、それぞれがぐるりと反転していく。

「え・・・」

目の前の光景に黒子も美琴もただ息を呑むばかり。紫色のスーツは一変し白衣に、長く後ろで纏められた髪は白髪のおールバックスタイルに、つややかだった肌は張りを失ったそれ相応のしわを増した肌
に、すべてが滑らかに変化していく。テレステーナから反転したのは白衣を着た年老いた男性・・・テレステーナとはまったくの別人だが、狂喜的な表情に仁科を見つめる奇異な目はテレステーナ
のそれに重なる。

「木原・・・幻生げんせい」

「覚えていてくれて光栄だよ・・・司君。君を手放さなければならなかったのは、私の研究の完成を大いに狂わされた」

両手を後ろに回し腰のあたりで組み、少し猫背気味に上体を降ろす。
「手の込んだ真似をしてるじゃねーか」

「ふっふっふ。これは私の孫娘・・テレスティーナの能力でね。あの人物に成り済ます能力、私は完全偽装と呼んでいるがね」

「お前・・自分の孫まで・・」
自然と奥歯をかみ締める力が強まる。

「だが、欠点があつてね。成り済ます人物の事を把握しないといけなくてね・・所詮はレベル2。使えん娘だ・・まあ、今回は君達兄弟を欺けただけでもよしとしよう」

そういつて気持ちの悪い笑みを浮かべ司のほうへ歩き出す。それと同時に近づかれないように木原の周りを円を書くように歩き一定の距離を保つ。

「それにしても・・君の能力はすばらしい。まさか私の車をコピーするとはね。さすがレベル6の可能性を秘めた・・とでも言おうか」
「レベル・・6・・」

美琴は呟く。司は気に入らないように、やめると木原を制するが効果はなくそのまま話を続けていく。

「バンクを見たよ、君のデータを何度もね。君はレベル2のメタコピー（物体複写）。ひそかに身体検査も確認した。本や机を30程度コピー・・それで無能科学者どもはレベル2と決め付けるとは・・」

やれやれと首を振り世の中の科学者を否定する。

「君の能力はすばらしいコピーだ。本当は、武器に兵器・・さらには金・・あらゆる物体を脳で理解しコピーできる。戦車であれば役1万ほどコピーできる・・恐ろしいまでの軍隊の完成。ただ君は一度に覚えられる物体は1つ、さらに・・生物はコピーできないというのさえなければね。生物さえコピーできれば、無限に実験対象を増やし研究は加速度的に進歩し、そして無限の軍隊を生成・・それさえできれば君は・・きみはあ」

口から涎をたれながし、狂ったように理想を自分の欲望を口からこぼれ溢れ出す。目は宙を眺め脳内で己が未来・・妄想を繰り返して再生させる。

「うるせえぞジジイ。ここで終わらせてやる」

「ぐふふふ。知っていると……君はある程度の能力もコピーできるんだろ？あの一位のガキとの戦いは中々興味深かった……それでもせいぜい君はレベル4だよ。複写欠陥能力者の司君」

その言葉に司は激情し木原へ向かって走り出す。

「はっはっはっは」

近づく司をあざ笑うかのように、空中を独歩し司との間合いをとる。

「ふふふ、君の能力コピーの力も暴いていこうか」

その言葉を言い終えると同時に空中から瞬間に姿が消える。

「ほらここだよ」

美琴の時と同じように司の背後に立つ木原。

「空間移動能力ですって」

黒子は声を上げた。黒子並みに正確な空間移動、それほどまでの使

い手は学園としないで数えるほどしかない。しかし……

「幻想御手を使えば、低い空間移動能力者でも……」

美琴の言葉に黒子ははっとした。空間移動系は最低でもレベル3に

位置される。幻想御手を使ったことにより黒子と同等、もしくは黒

子以上の力を持っていてもおかしくはない。

「くっ」

司が振り向くのより早く木原は拳より爆発的な衝撃を発する。だが

びくともしない司に違和感を覚え後ろへ飛び退く。直後振り向いた

司が右手を振りかぶり拳を突き出す。と同時に木原は念動能力で瓦

礫を盾代わりに司との間に滑り込ませる。司の拳が瓦礫に触れた瞬

間、ドンという音と共に瓦礫はガラガラと砕けその衝撃は木原へ届

く。だが慌てる事無く空中を飛び歩き再び仁科との距離をあけた。

「まさか……衝撃までコピーできるとは少し驚きだよ仁科君」

そういつて少しうれしそうに口の端に笑みを浮かべるが、目は相変

わらず笑っておらず見開いたまま司を捉える。

「わかりましたわ。あれは空間能力系でもレベル3に分類されてい

る、対象人物の背後へと移動する能力ですわ」

「テレポートとは違うの？」

「私のは1次元上の理論値を演算する事によって可能にしていますが、あれは対象のの位置情報を把握し背後へ移動する能力の為、演算は比較的楽ですの。1次元上の演算ができない能力者って事に・・・」

「そこのお嬢さん・・・すばらしい。君がいればこの能力者はいらなくなる。この背面移動・・・いくなれば死角への移動は使い勝手が悪いのだよ」

顎に手を沿え満足そうに頷く。

「ふふふ。話がそれってしまったね。司君。君のコピーには感嘆する。衝撃までコピーできるとは・・・そしてコピーするときは一方通行並みの防御力だねえ。すべてを吸収する・・・だから無傷。いや、結構結構」

「それで？それがわかった所で・・・」

「それから能力コピーについてだが、君は発電、発炎系は受けた分だけしかコピーできない。つまり自分では発電も発炎もできない。わかりやすく言えば電撃を100受けたとしたら・・・100を使い切ったら電撃は撃てない・・・だからネタ切れになる」

ひっひっひと嫌味を覚える笑みを浮かべ圧倒的な威圧を発する。

「御坂さん、白井さん。悔しいですが俺には手が余る相手です・・・協力お願いできますか？」

「もちろんですの」

「当たり前でしょ。こいつを倒して・・・私達の日常を取り戻す」

黒子は太もものホルダーから鉄矢を手にテレポートさせ、美琴はちよっと前の放心状態から回復しバチバチと帯電していく。

「さあ来なさい実験対象達よ」

そういつて木原は白衣をたなびかせた。

T16 仁科の世界8・完全偽装（フェイク）（後書き）

さーどうでしたでしょうか。

テレスティーナ・・・実は木原幻生だったのですよ。

これはすけすけみるみるしたら、すぐわかったはずなのですー。

ちなみに木原はレベルの低いテレスの事にほとんど興味は無く、こんな無能な孫娘の姿をしている事に腹をたてて、14話の鏡を割ったのです。という解説です（笑）

次回17話をお楽しみにね

T17 仁科の世界9・賭して永久に（前書き）

前回までではテレスティーナは木原幻生だったという事が、
判明しましたね。

それでは第17話ご覧ください。

T17 仁科の世界9・賭して永久に

黒子の空間移動も美琴の電撃も木原の多才能力マルチスキルにより、二人の息のあつた攻撃を難なく防いでいる。防ぐだけではなく反撃に転じ3対1の状況でも、木原は圧倒的な能力事の知識が多才能力とあわさり、補うほどの強さを発揮する。一方通行に言われたように司の攻撃は後手の能力であり、敵の能力と攻撃があつてこそその攻撃となるため、木原は不要に司を狙わない。

「なんと味気ない・・・サンプルはサンプルらしく、私の言う事は聞くもんだよ」

美琴への背後移動は、黒子がレポートしながらうまく美琴への被害をかわしている。しかしすかさず風刃と追撃に地面を突起させ二人に考える隙を与えさせない。仁科に対しても一定の距離とけん制をしつつ二人を追い詰める。

「黒子お」

突然の呼びかけに体をびくつと反応させ司を見る。いつも以上に、今まで以上に真剣な表情に、黒子はこの場には似つかわしくない感情を少しだけ抱く。

「こっちだ」

その言葉に従うように、美琴を掴んだまま司の背後へ移動する。

「な、なんですか？急に」

顔を直視できず少しだけ視線をずらす。頬は少しだけ赤く染まっている。

「俺をやつの上に飛ばせ」

「え・・・えつと」

「いいから」

いつになく真剣な表情の司に圧倒されつつ、言われたとおりに司を移動させる。頭上に現れた司を確認する前にすで頭上めがけて瓦礫を飛ばしておいた木原は、司に攻撃させる隙を与えずに瓦礫に突き

飛ばさせた。瓦礫に対して防御はしたものの、そのまま瓦礫に押されるように地面に叩きつけられた。

「仁科君・・・君のそれは、相手が君の能力を知らないからこそ意味がある。知っている相手には」

「それはどうかな」

木原の言葉を遮った司は、誰にも気づかれず木原の後ろに立っている。初めて油断と隙を見せた木原の背中に、初めての打撃を浴びせる。突き出しだ右の拳、間髪いれずに肘撃。体をそのまま水平回転させ腰の辺りに遠心力を加えた回し蹴り。さらに詰め寄った司だったが確認せず背後に向けて木原の掌から炎が飛び出した。だがすでにそこに司の姿はなく、美琴と黒子の前に立っている。

「すばらしい・・・すばらしいよ司君。レポートさせたのは攻撃するためじゃない・・・コピーが目的とは」

額に手をあて肩を震わせる。怒りでも悲しみでもなく、彼の顔は愉悅に満ちた表情をしている。

「空間移動系の能力もコピーできるとは・・・。そうか演算自体は自身だけでなくコピーされた本人にも無意識かにさせている・・・これはすばらしい。つまりすべてを負担させないから本人にはなんの違和感もない・・・私の多才能力システムにも通ずる・・・さすがは司君・・・」

誰にいうわけでもなくただひたすらぶつぶつと呟く。ただ声のボリユームが大きいため、三人にも聞こえてはいるが、あまりにも異質な木原のそれには不気味さを感じる。

「はあ、はあ・・・」

左手で頭を抑えながら黒子へと向き直る。

「仁科さん、大丈夫ですよ」

「あんた」

「白井さん・・・いいか、俺と二人でやつを翻弄する・・・御坂さん」

「なに」

「ありったけ電撃・・・ためといて」

「わかったわ」

「これが・・チャン・・う」

司は頭を抑え肩膝をつき顔は苦痛に歪める

「ちよつと」

美琴が心配そうに顔を覗き込むも、司は口元だけ笑みを浮かべる。

「これがチャンス。俺と白井さん・・二人で連続でテレポートし続ける。それでも多才能力の前では少ししかもたないかも」

「私達が囷・・という事ですわね」

「そう、白井さんは俺が合図したらお互い左右ばらばらに木原から離れて」

「わかりましたわ」

「そこへ全力の超電磁砲レールガンを・・御坂さん」

そう言っている司の顔からは汗が滴り落ちる。顔色も先ほどよりも青ざめてきている。

「でもあんたがやばいんじゃない」

「大丈夫・・いくら白井さんの脳に補助してもらっていても・・俺の脳では1次元の演算はつらい。これで決めよう」

「わかりましたわ」

「わかった」

美琴と黒子は頷き最後の攻撃を開始する。

「白井さん」

「行きますわよ。遅れたらしょうちしませんから
「いくよ」

二人同時にテレポートする。木原はそれに反応するように能力を応酬し二人を襲う。二人は息を合わせながら木原の上に左右に連続で移動させ木原を翻弄していく。テレポで現れた所へ攻撃を放つてもそのときには別の位置に現れ木原に打撃での攻撃を与えていく。

「白井さん」

「はい」

それと同時に二人は左右別々にテレポートし木原から距離を置く。

「ただの実験対象サンプルがああああああ」

叫びと共に自分を中心に全方向へ、ドンという音と共に衝撃波を放出させる。あたりに待っていた砂塵はその波によってはじかれ、急激に視界を良好にさせる。そして木原が見たものは、青白い電撃を身にまとわせこちらへ右手を突き出す。

「あんだ、人間を何だと持つてるの。人の心を弄んで・・多くの人を巻き込んでおいて・・」

「学園都市の人間・・すべてが実験対象サンプル。それをどう使おうが我々の自由だ」

「ぶざけんな。あんたは・・あんたは・・絶対許さない」

「ふっふっふ。許す？君は我々に研究される側・・我々に口答えするとは・・驕るなガキ共」

木原も美琴と同じように右手を突き出す。白光の粒子が手に集まりやがて凝縮する。

「これで終わりにする」

右手から放り上げられたコインがクルクルと落ちてくる。

「もういらん・・レベル5・・お前など」

白光が一層凝縮され収縮と拡大を繰り返し激しく光る。

「全部・・返してもらおうわ」

「私は・・私は・・神を」

お互いから発せられた一筋の光のラインは側面をかすらせつつ交差す。美琴から発射されたコインを先頭に超電磁砲は、かすった反動で照準がやや上気味にずれる。木原から放たれた収縮された光の粒子はかすった衝撃で照準を下気味にずれていく。何よりも速く通り空気を切り裂いた白い砲線。まっすぐな青白くオレンジの宙影を残した電撃の一線。遮るもののない美琴の超電磁砲レールガンは木原の額をぶち抜いた。その衝撃で後方へと吹き飛んだ木原は、高速道路の高架脚部分に直撃し赤い線を下に引きながらずり落ちた。

「ど、どうなりましたの？」

黒子は反対側で仰向けに倒れている司の旨が上下に動いているのを

確認すると、悲鳴を上げる体を起こし美琴のほうへと視線を向けた。
「お姉様」

ゆらゆらと立っている美琴を発見し安堵の涙を頬に走らせる。そして美琴はゆっくりとうつ伏せに地面に倒れた。

「お、お姉様？」

なにか異変にきづき、少し炒めた足をひきずりながら美琴へと近づく。

「御坂さん」

いつのまにか下に降りてきていた来ていた初春も、美琴のほうへ駆け寄る。

「お姉様・・・お姉様！」

黒子の悲痛の叫びにもピクリとも反応しない美琴の左胸の辺りには、こげた制服と赤い染みが面積を増していった。口からも赤黒いドロつとしたものは流れ落ち、みるみる冷たくなっていく。

「お姉様嫌ですわお姉様・・・お姉様。目を開けてお姉様。どうして・・・どうして・・・おねえさまああ」

美琴の表情はとても穏やかなで、今にも起きてきそうな・・・そんな表情をしていた。

T17 仁科の世界9・賭して永久に（後書き）

いかがでしたでしょうか。

ラストがうまく表現できず、悔しいです。

宣言していた通り、美琴……。

どうしてもメインキャラの死というものを書いて見たくて……

感想お待ちしてますですー

それでは18話でお会いしましょう

T18 仁科の世界10・終わりと始まりと(前書き)

ちよーつと更新遅れちゃいました。
では本編でござ

御坂美琴の告別式は、厳かに行われた。常盤台中学の女子生徒はほとんど泣き崩れ、中には倒れる人も出たほどである。あの厳しい寮監でさえ目に涙をため、別れを告げるときにはいつもから想像できないほど、両目から涙を流していた。黒子もその中の一人であった。いつ晴れるともわからない心の闇、いて当たり前の存在の喪失感で黒子は覆われていた。虚ろな瞳で生前の彼女の笑顔の写真を見るたびに、嗚咽をもらし視界が波を打つ。その式の中に目も頬も赤くさせ同じように泣いている初春の姿もあった。美琴が木原を倒したことにより、幻想御手レキルアッパの事件は解決するかと思われたが、彼の異常なまでの自我の影響で目覚めた使用者が暴れ出すという事態に発展していた。木原の自我によつて、個人の脳波にノイズが残っており、目覚めた直後に暴れ出すものや退院後になんらかの拍子に暴れ出す者など多岐にわたる。異常なまでの木原の自我を、非公式ではあるが木原ウィルスと医者達の間では名づけられている。それがどのルートを通つたのか不明だが、ネット掲示板にも書き込まれたりし一般人にも名前だけは広まって言った。

それとは別に使用者のまだ半数以上が目覚めない状況で、具体的な目覚めさせる方法や、木原ウィルスを駆除するワクチン的なものも見つからずまだまだこの事件は終わらないことを告げている。その目覚めない使用者の中に佐天涙子の名前も上がっていた。

「そうか・・・」

そんな式の話をお院のベッドの上で、お見舞いに来ていた初春から聞かされた。

「はい、仁科さん・・・これは現実なんでしょうか・・・」

そういつて初春は視線を落とす。

「私・・・まだ信じられません・・・あの御坂さんが」

言葉の途中で初春はまた何度目かの涙を流した。司は初春の頭をそつと撫でる。誰もが信じられない

学校指定のセーターの左胸の部分から、赤い染みがその面積を広げていく。左胸を通過した白光の砲線はセーターの部分黒く焦がした。黒子と初春がいくら叫んでも、いつものように「大丈夫よ」と返事を返してはくれないその美琴の体は、すーっと体温を感じなくなっていく。警備員アンチスキルが救護を呼ぶもすでに……。すこし半狂乱気味な取り乱し方をした黒子は、警備員アンチスキルの隊長によって押さえられそのまま美琴と一緒に搬送されていった。そのまま警備員は現場の後処理を、初春は仁科の救護を行った。そしてその日から1週間が経っていた。

「仁科さんすいません」

目をハンカチで拭きながらまだ赤く腫れた目で司を見つめる。

「風紀委員のお仕事がありますので」
ジャケットメント

「そうか……。無理しないように」

「それは……。お互い様ですよ」

そういつて最後は少しだけ微笑んでこの部屋を出て行った。

「式……。最後の挨拶いけなかつたな……」

司はまだ青い空を見ながら、雲の動きを目で追った。あの後、レポートをコピーし高速での連続移動の反動で意識を失い、その3日後に目が覚めた。医者からはまだ安静にするようにといわれ、結局美琴の式には参列できなかった。

（御坂さん……。俺は泣きませんよ。あなたが守ったこの学園都市は……。俺が……。俺たちみんなが……。あなたの代わりに守ります。だから安心して……）

口に出さず静かに誓った司は、ゆっくりと瞼を閉じた。次に目を開けた時には室内はオレンジ色の光が差し込み、先ほど青かった空には綺麗な橙が広がっていた。

「寝てた……。のか……」

時計を見ると先ほどから短針が結構動いていた。寝たのにもかかわ

らずまだ自分を覆う眠気に、再び目を閉じようとした司は視線を感じそちらへ視線を投げる。

「うおっ」

いつからいたのか、いつのまに入ってきたのかベッドの右側には黒子が立っていた。顔を下に向け前髪で表情が見えづらいが、唇が震えているのがわかった。

「白井さん・・・座ったら？」

そういつて黒子へ微笑む。しばらく微動だしない黒子だったが、近くの椅子を引き寄せてそつと腰を降ろした。黒子は中々口を開かないでいた。黒子の言葉を待とうと司は天井の一転を見つめる。時計の針の音がやけに鮮明に聞こえる。

「わたくし・・・」

黒子がポツリポツリと話し出す。

「これからも・・・風紀委員として・・・」
ジャツジメント

震える唇をかみ締め、感情を押し殺す。

「お姉様が・・・守ったこの都市を・・・お姉様との思い出を・・・」

黒子は司の布団の中へそつと手を忍ばせる。司は右手の指先を何かにそつと触れられた感覚に少しだけ体を強張らせたが、それが何が気づきその触れたものと同じようにそつと触れ返す。

「だから・・・今だけは・・・」

そういつて黒子は顔を静かに布団にうずめた。誰にも表情を見られないように、ただ司の手に触れる力だけが少しだけ増した。司のちようど右手の二の腕の所に顔をうずめ、体は小さく震えている。少し体を横に向け左手でそつと黒子の頭に触れる。子供をあやすように撫でた。そして黒子は我慢していた言葉を・・・嗚咽と共に吐き出した。

すっかり日も暮れ、そろそろ黒子の寮の門限の時間危ないなと思いつつも、規則正しい寝息をジャマするのも気が引けるのでどうし

ようかベッドの上で司はうーむと考え込む。そろそろ見舞い等の面会時間が迫る頃だが、廊下が少し騒がしい。

「ンだア？さつさと行けば良いだろオが・・・ったくメンドクセエ」
ガラガラと引き戸のドアを乱雑に開けられ、その音で寢息を立てていた黒子は体制に気づいたらしく、ガバツと起き上がる。入り口の方へ目をやると知っている顔が一人と・・・初めて会う気がしないような顔が・・・二つ。

「お姉様」

そういつて黒子は飛びつく。無理もない、一人は御坂美琴にそっくりでもう一人は幼いが顔は美琴にそっくりなのだから。

「って・・・お姉様にしては胸が・・・腰も前よりも細・・・」
そこまで言って、慌ててそこから飛び離れる。その勢いで椅子にひっかかり黒子がしりもちをついた。

「いたたた」

お尻をさすりながら立ち上がった黒子は、クスクスと笑いをこらえる司をみてそつぽを向く。

「白井黒子さんはじめまして、と美里は飛び切りの笑顔をあなたに向けます」

そういつて黒子の手を掴みとつても激しい握手をする。

「えと・・・あの・・・」

「私は美琴お姉様の妹です。御坂家次女御坂美里です、と激しくあなたに抱きつきます」

「うぐえ・・・ちょ・・・苦しいですわ」

「わー楽しそう、と美都は美都はまけずに一方通行あなたに飛びついてみたり」

「うつつとうしい」

「一方通行アクセラレータ・・・おまえ・・・ロリコンに・・・」

そういう司の顔に零距离近くまで顔を付け、ものすごい形相で睨みつける。ただ近すぎて司にはその形相が見えない。ただものすごい殺意を感じたので、とりあえず謝っておいた。

美琴そっくりな二人によると美琴の妹であり、次女の御坂美里は美琴の1つ年下で黒子と同学年。三女の御坂美都は10歳で小学4年生との事だった。美琴から黒子の話を聞いていた美里は、やっと実物にあえて興奮。そのやりとりに影響され美都は一方通行にじゃれつく。美都と一方通行の馴れ初めを聞いてみたり。やっとレベル4になったので、常盤台で美琴と一緒に通えるのを楽しみにしていたと美里は言った。そんなやりとりをしつつ、もうすっかり夜も更け三人は突風のように帰っていった。二人きりになった室内はふたたび静寂を取り戻した。

「妹さん達は・・・きつと私以上に悲しい思いをしてますわね」

「二人とも御坂さんの事大好きだったんだね」

「わたくし・・・立ち止まってなんていられませんわ。わたくしもお姉様のように・・・誰かの希望になれるように・・・」

そういつて鞆を手に取り部屋の入り口へと黒子は歩き出した。それでは、と告げてこの部屋のドアを開ける。

「そうですわ・・・さっきの事・・・ばらしたら承知しませんわよ」

「さっきの・・・？」

ああ、と先ほどの姉妹の話じゃなく泣いている事だと理解した司は、返答しようと黒子を見ようとすがその頭すれすれに鉄矢が壁に突き刺さる・・・

「し・ら・い・さ・ん・わ・か・り・ま・し・た」

少し震えつつ答えると満足したように黒子は微笑を浮かべ部屋を後にした。司は額を伝ってくる液体に恐怖を覚えつつナーズコールを鳴らした。

相変わらず風紀委員の仕事に多忙されつつ、新たに配属となった御坂美里に手を焼きつつ、あれから2年が経った。そして秘密裏に行われていた木原の精神を受けたプロジェクトKIHARAにより、多才能力システム実用化の為、能力者の確保をするために並行世界への干渉が始まった。それを阻止すべく司の兄、仁科清隆によ

り風紀委員と警備員の精鋭を選抜し各世界へと送り込んだ。

仁科清隆のチームにより、一部の脳波ノイズ「木原ウィルス」を除く去るワクチンソフトが完成し、昏睡していた「幻想御手レベルアップバーの使用者は無事に目覚めており、今ではほとんどの昏睡者を回復させている。暴れ出した者達にも効果があり症状は改善されている。

ただ回復者の中にも、昏睡者の中にも佐天涙子の姿は無かった。失踪・・・彼女のデータは失踪者リストへ移動されていた。

季節はすっかり春、入学の時期を一月ずれてその彼は黒板に自分の名前を書いた。ここ荒八戸高校はそんなにレベルの高い学校ではないが、他校よりも自由な校風が人気でそれなりに学生の数は多い。

「今日転校してきました仁科司です。みなさん、よろしく」

そしてここから始まった。

T18 仁科の世界10・終わりと始まりと（後書き）

いかがでしたでしょうか

えー仁科の世界編ラストです。

大事な人を失うというのが、味わったこと無いのでうまく表現がで
きたでしょうか。

次回から誘拐事件の犯人を追いかけます。

お楽しみにね

「な、なんかあたしたし・・・久しぶりな感じじゃない？」

「そ、そうですね・・・」

「はあく、なんか私出番少ないです」

「いや、初春よりあたしの方が無いから」

わけのわからないことを口走ったりし出したが、とりあえず司はしばらく観察することにした。

「つて、あたし死んだよ・・・一応主人公とかヒロインなのに」

「お姉様、私はお姉様を愛していますわぁ」

「私・・・影薄いのかな・・・うう」

「あぁー、初春泣かない泣かない。泣いたら初春が今日はいてるクローバーの下着で四つ葉を」

「あわわわ、佐天さん何してるんですか。捲らないでください」

.....

「も、もう満足したかな？」

「あ、本編行く？それではどーぞー」

ふう、と話し終えた司は深く息を吐いた。全員の顔は少しばかりこわばって見える。並行世界の話、仁科の今までの話、そして美琴が死んだという話。すべてをその場で理解できるほど人間はできてない。それはわかっている。ただ今起きている事件を知る上での元凶、そして自分の能力の事。伝えるべき事は伝えた・・・あとは「ほんと常軌を逸してるわね」

美琴が沈黙を破る。

「にわかには信じ固いですわ」

「並行世界と急に言われても・・・」

「ほんとですわ。お姉さまがやられるなんて・・・私は、お姉さまをお守ぐえ」

美琴に飛び掛る直前に、美琴が黒子を制した

「ひどいですのお姉様」

「今はあたしが倒されたかなんてどーでもいいでしょう」

「だめですわ。お姉様がいなくなったら黒子は・・・黒子は」

「あーはいはい」

半分あきらめたのか美琴は相手をするのをやめた。それでも抱きつく黒子にたいし、剥がそうと抵抗する。

「私は、仁科さんが嘘をついてるとは思えません。佐天さんもそうおも」

同意を求めようとした初春の目には、キラキラと目を輝かせた満面の笑みの涙子の姿が映る

「並行世界・・・パラレルワールド、すごい・・・まさしく不思議がここに終結してる。初春、どうしよう。私たちとんでもない事の原因があるんだね」

「うわ、佐天さんのスイッチ入っちゃった」

露骨に嫌そうな、引き気味の表情で体を気持ち涙子から話す。

「えっと・・・」

四者四様の姿に司の方が戸惑ってしまった。全員いつもの雰囲気、先ほどまでの雰囲気とは一変している。とても居心地のいい、自分の世界でこの四人と過ごした日々を思い出す。

「とりあえず、その誘拐犯てのを捕まえる事が先決よ」

「そうですね、誘拐された人達の安否がわかりませんと」

美琴の胸の間で黒子が言う。

「あなたは離れなさい」

「黒子とスキンシップとってくださいまし」

「あなた過剰なのよ」

本日2度目のゲンコツでしぶしぶ美琴から離れた黒子は頭をさする。

「それで・やつらの場所はわかつてるの？」

「みなさんが知ってる場所です・・・捨てられた23学区のとある研究所ですよ」

そこはこちらの世界でテレスティーナがレベル6を作ろうとした研究所、最下層にはその設備がある。

「絶対みんなを助けよう」

「湾内さんに誘拐された人も全員」

「みんな・・・ありがとう」

「何言ってるの？これが終わったら本気で勝負しなさい」

「え？えええ。こっちの御坂さんもあつちも同じですね」

「どこのあたしも、そうそう変わらないわよ」

そんな話をしている内に、面会時間の終わりが近づいていた。そこは橙いろから紺が空のほとんどを覆っている。

「今日はそろそろ帰りましょう。続きはまた明日・・・って事で」

「そうですね・・・」

「あなたは寝てなさい。明日迎えに来るから、今日はここで大人しくしてんのよ」

「そうですね。私、白井さんの分まで頑張ります」

「初春」

黒子が初春のほっぺをよこに引き伸ばす。

「いふあい、いひゃいです。しらひゃん」

悪い笑みを浮かべている黒子、反対に初春は涙目になっている。

「それじゃあね黒子」

そういつて司を含めた黒子以外の全員がぞろぞろと部屋から出て行った。一人残された病室のベッドに再び横りなり、目を閉じるといつもより耳が鮮明に聞こえてくる。全員の足音が小さくなるのと入れ違いにカツカツと硬い靴底の音が大きくなる。司の話の整理とまだ体に残る痛みにより、ベッドへ沈むように意識も落ちていく。ただ先ほどから聞こえる足音が黒子の意識を現実と夢の間をさまよわせる。その靴音が黒子の部屋の前で消えた。消えたというよりも止まった。黒子は急いで起きあがき、来訪者の出現を待つ。

ガラガラ

ドアがゆっくりと開く音が聞こえる。キャスターがクルクルと回り開かれる。

入ってきた人物は黒子がふと頭によぎった相手、膝に届きそうな黒髪の女性。自分をこんな目に合わせた相手。その手に持つ電子端末の画面には、後ろ手に拘束され気絶した少女が映し出される。何かにぶつかつたように頬が赤く腫れあがっていた。

「あなた、私の級友をどうするおつもりですの」

「白井黒子・・・お前の返事した・・・うう・・・ああああ」

突然女が頭を抱え出し苦しみ出す。目が見開かれ口からは涎もたれ流れている。

「ちよつと・・・あなた?・・・」

「ごめんね、・・・***」

声にならない言葉を唇の動きで、最後の無音の言葉を聞いた黒子は、相手の顔を凝視する。しかし・・・

「きゃっ」

直後女から放たれた例の能力の衝撃により壁に叩きつけられる。

「うっはっは。うぜえ．．うぜえ。引っ込んでろよお」

叩きつけられ気絶した黒子を執拗に何度も叩きつける。ベッドは変な形に曲がり、部屋の壁には無痛の傷やへこみが出来ていた。

美琴達が連絡を受けた病院でみたのは、別室に運ばれ傷つき意識を失ってベットに寝ている黒子の姿だった。美琴の頼みで司と初春と涙子は明日に備え帰宅する事にした。

「黒子．．．」

そういつて傷つき眠っている黒子の手を握る。

「2度も危険な目に合わせてごめん．．．。仇はあたしがとる。絶対ゆるさない」

固い決意とぶつけようの無い怒り、無意識に額の部分でバチバチと発電する。

「お・ね．．．」

黒子の唇がかすかに動く。震えながらゆっくりと。うっすらと目を開きその瞳は美琴をとらえる。

「黒子！ちよつと先生を．．．」

ぐつと美琴の手を握る。

「お姉様．．あの女性も．．きつと被害者なんですの」

「黒子．．．」

「仁科さんの．．話通りなら、．．彼女を助けてくだ．．．」

再び黒子は目を閉じた。美琴に託し安心したのか、少しだけ笑みを浮かべるような表情で。ナースコールでやってきた看護婦に状況を説明し、その場を任せた美琴は病院を後にした。自分の不甲斐なさ、そして相手への怒り．．しかし黒子の言葉でそれを押しとどめる。決着をつけるために、黒子に託された思いを拳に秘め、彼女は病院に背を向け歩き出した。

T19 黒髪の女（後書き）

てなわけでパラレルトラベラーも仁科の世界から、美琴達の世界へ話を戻り最終章が始まります。

最後までお付き合いください

T20 武舞台へ（前書き）

ラストバトル前の閑話みたいな感じですよ

まったりの20話ぐらいぞー

T20 武舞台へ

「アンタ・・・」

病院の門のに背を預け星を眺めている司の姿がそこにあった。先ほど初春と涙子を送るようにお願ひし、帰るよう促していた。

「もしかしたら、一人で殴りこみに行ってしまうんじゃないかと思つてね」

司は視線だけを美琴へ向けた。その表情は怒りとも悲しみとも、両方取れるようで端から見れば無表情に近い。だが震える拳から彼女の感情が溢れている。

「ほつといて。これはあたし個人の問題だから」

「ほつとけません。御坂さんだけじゃなく、白井さんの仇を討ちたいのは私も同じです」

頬を上気させ司の影からひよいつと初春が顔をのぞかせる。

「そーですよ」

そういつて後ろから美琴の手が握られる。強い瞳を輝かせた佐天がまっすぐに美琴を見つめる。

「怒っているのは御坂だけじゃないんです。わたしも・・・わたしも初春も仁科さんも」

「みんな・・・うん。ごめん」

「それじゃ、行きましようか・・・」

司の言葉に全員が頷く。幸いまだ公共機関は動いているため、23区へ向かうのには問題なかった。

彼らがこの病院を出発して、23区の研究施設へ辿り着くときには、病室から黒子の姿が消えていた。

「あんたさあ、あの女の能力・・・知ってるんでしょ」

23区へ向かう途中、電車の中で美琴は司へ問いただす。その言葉を肯定するように、司は頷いた。

「能力は時空歪曲場を発生させる能力です。ディストーションヴェール、もしくはディストーションフィールドといえます」

「時空歪曲・・・」

「どっかで聞いたような・・・えーと」

初春が額に人差し指を当てて唸っている。

「そうです。この発生させた周囲の空間をゆがませて、攻撃をそらしてしまう。いわゆるバリアみたいなものです。電撃やプラズマ、光学系の能力者や兵器に対しての効果は絶大で、相手に当たる前にそれてしまいます」

「だからあの時」

美琴は女と対峙した時の事を思い出した。何度放つても横へそれてしまう電撃。

「ですがだからこそ御坂さんが必要なのです」

「あたしが？でもさっきも言ったように全然当たらなくて」

「たしかに電撃は逸らされますが、あなたにはもう一つ必殺があるじゃないですか。時空歪曲場は物質攻撃には弱いんです。たしかに生半可な物理攻撃では、歪曲場を発生するときの空間を歪ませるときに生まれる、衝撃ではじかれたり粉々にされたりするかもしれません。ですが、電磁的な音速をも越える速度の超電磁砲レールガンなら、あれを突き破れます」

「・・・わかったわ。それにあの時押しつぶされそうになったのって、重力の重さではなく歪曲場が発生した際の衝撃でってわかったし。あたしは2度も負けないわ」

「あれ？負けを認めるんですね」

「ちが・・・負けてないわよ。今度こそ決着をつけるの」

「わ、わわ御坂さん。今電撃放つたら電車止まっちゃいますって」

慌てて涙子が止めに入る。初春もあわあわと二人をなだめようとしていた。

「見張りいませんね」

通路は電気が通っていないのか、真つ暗なため涙子は転びそうになる。

「いい？あいつはあたしがやるから・・・あんたは邪魔しないで」

「はいはい」

やれやれといったように司は返事をした。

「初春さんと佐天さんは、誘拐された人たちを助け出してください。恐らく眠らされてますから、慌てず首輪をはずしてください」

「わかりました」

「まかせてくださいよ、お二人が戦っている間に全員助けてみせます」

そんな会話をしていると目的の中央制御室に到着した。通路と違い電力は供給されていて、室内の光がまぶしくも感じた。

「やっぱり、下の階に電力供給を集中させてますね」

メインシステムを操作する初春は、的確に必要な情報をモニタに表示させていく。

「最下層・・・モニタにです」

映し出されたモニタには、例の女がカメラのほうに向いていた。視線は明らかにはっきりとカメラを捕らえている。人差し指を上突き出し、顔のほうへ2度3度と倒す。その行為に美琴の目が徐々に血走っていく。

「あちらさん、こちらに気づいているみたいですよ」

「上等じゃない・・・。後悔させてやる」

走り出そうとした美琴の手を司は掴む。

「なによ」

「殺さないでくださいね」

「さあ・・・どうだか」

「あなたはきつと殺せません。御坂さんは優しいですから」

「な・・・」

突然の台詞に赤面する御坂をよそに、司は話を続ける。

「彼女も被害者ですから、助けましょう。それと・・・チャンスを逃さないで」

言い終えた司の手を振りほどき、ものすごいはやさで中央制御室から飛び出していった。

「もしかして・・・仁科さんて御坂さんの事」

「うーむ、でも話を聞く上ではむこうの白井さんといい雰囲気なんじゃ？」

「でも途中ででてきた女の子も気になり」

初春と涙子は背後からの刺されるような視線を感じ振り向く。

「ご、ごめんなさい」

「いえ、いいんです。向こうのお二人と同じなら・・・」

そういつて初春と涙子にそれぞれ耳打ちをする。

「な、なななん」

「仁科さん、どうしてそれを」

あわてふためく二人を見ながら司は笑っていた。

「そうだ、佐天さん」

「はい？」

これを預かっけていてください。そういつて四角いケースを佐天に手渡した。

「これはなんですか？」

司は少しだけ微笑んだ。

「お守り・・・ですかね。最後の切り札みたいなの？なんてね」

そういつて手をひらひらさせながら制御室から出て行った。

「なんだろう・・・」

「それよりも、戦いが始まったら私達で誘拐された人たちを助けましょう」

「そうだね・・・今回は金属バットないけど」

「大丈夫です」

そういつて初春が指をさす。その先には鉄パイプが転がっていた。

T20 武舞台へ（後書き）

残すところもあとちょっと。

今回はバトルまっしぐらです

こっちの美琴の活躍はあるのか！！
それは俺次第です。

T 2 1 決戦（前書き）

と言う事で、ついに21話までできました。

これも単に読者様のおかげです。ありがとうございます。

それでは本編どうぞ

薄れ行く意識の中で思い描くのは親友の笑顔。

真つ暗な世界でただ一人・・・

孤独の中で後悔と親友の声

いつここから抜け出せるかもわからず彷徨い・・・

ただ願うは今は遠い親友と会えたらと・・・

目の前には少し息を切らせた少女が立っている

こちらへ向けられた視線には怒りや殺気がこめられている

きつと断罪されるべきなのだろう・・・ただ今はとまらない

きつと断罪されたいのだろう・・・あいまいな記憶の中

ただただ私は目を瞑る・・・すべてをあきらめるために

「あんだ・・・黒子の仇とらせてもらおうよ」

美琴は対峙している女へ向けて怒りをぶつける。殺気だった彼女の目は今まで見たこと無いくらい、鋭くなっている。

「なめられたものだ・・・。ドゥペルならいざ知らず、電撃如き」

「如きかどうか、受けてみるおお」

放たれた電撃は、バチバチと音を立てて床を這いながら向かっていく。

「ワンパターンだ」

彼女を中心に時空歪曲場を半球体に展開する。電撃は彼女をそれ後方の壁を破壊する。

「歪曲場・・・ほんと嫌な能力ね」

「ほう・・・あの男に聞いたか」

ふん、と右手を美琴へ突き出す。前に戦った時の事を思い出し、美琴は今いる場所から急いで右へ移動する。直後に美琴のいた場所の床が半球体上にへこんだ。歪曲場、空間を捻じ曲げる際に生じた衝撃を使い相手を攻撃する際にも強力な能力。以前それに押しつぶされそうになった事、そして司の説明で相手の手の動きに注意を払う。

「あんたの能力はお見通しなのよ」

「能力がわかった所でそれだけではないぞ」

美琴の電撃を放つ前に女は美琴へ向けて走り出す。鍛えられているのか、一步の移動距離が大きい。あつと言う間に迫ってきた彼女の一撃を見極め、横方向へ飛ぶ。すかさず右手に電撃を溜め一気に放つ。女は美琴との中間の距離に歪曲場を発生させる。へこんだ床の通過する電撃は、やはり直線での動きを強制的に逸らされる。

「くっ・・・やば」

攻撃の間を取らせないように、女の攻撃が始まる。女の右手の動きを見つつ、回避する方向を考える。歪曲場を遠距離に発生させる際、小さい球体が大きく膨らむような形で現れるため、美琴は遠距離で攻撃をされたさいは、歪曲場の発生をなんとなく感知し反対側へ避けていかわしていく。

「こんのおお」

近電流を流しくにあつた床の破片を、電磁の網で掴んむ。そのまま勢いよく女の方へ投げ飛ばす。

「器用だな」

飛んできたそれを避けるために、体をよこへずらす。右手の動きに合わせて受ける美琴の動きに一瞬にやりと笑う。

「まだま・ぐっ」

不意にお腹に衝撃を受け、美琴は後方へ弾き飛ばされる。顔をしかめつつも、相手に隙を与えない様にすぐさま起き上がる。

「そんな・・・」

「ふふ・・・右手だけかと思ったかい？」

そういつて左手を美琴の方へ向けていた。

「そ・んな」

「甘いな・・・」

「しまっ」

自分の右方向にそれを感じ急いで横へ飛ぶ。しかし先ほどのダメージがあるため、思った以上に体が思い。

「きやつ」

思い切り歪曲場の衝撃で左方向へ吹き飛ばされた。派手に床に衝突するが、勢いはとまらず転がっていく。息はしているものの、美琴はその場から動かない。

「これで目的は・・・」

そう言いかけて女は入り口のほうへ目を向ける。入り口の影からは、ゆっくりとこちらへ近づくと足跡が響いている。

「仁科・・・司・・・君がまだ残っていたねえ」

「木原の残りカス・・・ここで除去してやる」

入り口から入ってきた司は、美琴の姿を一瞥する。

「御坂美琴は・・・我々が連れて行くよ・・・仁科君」

声は普通の女の声・・・しかし話し方は司の良く知る人物。仁科の世界の幻想御手事件の張本人、木原の話し方と・・・

「あんたは死んでも・・・迷惑な意思を残しやがって

「ふっふっふ・・・私の行動はすべて高みのためだ」

「必ず助ける。だからそこで待つてろ」

「やって見るがいい・・・歪曲場は君の能力でもコピーはできないぞ。」

それは以前実証されているだろうに」

「コピーできなくても・・・倒せばいいんだよ」

うおおおと女へ向けて走り出す。女の生み出す歪曲場の衝撃を、コピーして無効化しつつ相手に迫る。

ドン

先ほどの衝撃を足から放つ。衝撃は通常より遙かに高い加速力を生み出し、女への間合いを一気に詰める。司の蹴りを女は掌で威力を受け流すように捌く。そのまま間髪いれずに司へ蹴りを放つも。うまく司の右腕で受け止める。

「このお」

「はあああああ」

司が攻撃する瞬間に、女は自分を中心に半球体に歪曲場を展開する。それをコピー状態で衝撃すべてを無効化する。すかさず衝撃を拳に転写させ女へ拳を突き出す。女もその突きに会わせ、歪曲場を発生させる。歪曲場を発生させた外側は、はじかれた空間が生み出した衝撃の膜があるため、直接能力に触れない司ではコピーができないのである。そのためその衝撃の威力だけをコピーしかできないため、女との戦闘の相性は悪い。それでも司は退かない。それは助けると約束した思い。

「しっこい」

衝撃を載せた拳と歪曲場を展開した衝撃がぶつかると。

「ぐっ」

歪曲場の衝撃が司の衝撃を上回り、カウンターの要領ではじかれる。

「ぶっぶっぶ」

そういつて倒れている司は背中を強打し、咳き込んでいる姿を見て、女は愉悦の表情を浮かべる。

「ぶん」

自分を中心に歪曲場を展開させる。直後に青白い電撃が横へそれて

いった。その方向へ視線を向けると、息を乱しながらもこちらをにらんでいる少女が立っていた。

「よそ見るんじゃないわよ。はぁ・・・はぁ・・・まだまだこれからぁ」

方膝をがくつと折りながらも、ゆっくりと姿勢を整える。

「何度やっても無駄だ・・・二人もいてこの程度とは」

「さぁ・・・行くわよ」

美琴の言葉が響き渡る。

T 2 1 決戦（後書き）

美琴頑張ってる感でてますでしょうか。

いつもやられ役っぽいですけど、頑張っていると信じてます。

次回もサービスサービス

T22 決着（前書き）

前回までのあらすじ

とりあえず最終決戦です・・・以上（笑）

何度目かの電撃も歪曲場によりすべてそらされる。電撃と電撃の間に、瓦礫を電磁石の要領で掴みそれを投げ飛ばす。

「苦し紛れはやめにしまえ」

「あたしの電撃以外は、あなたの能力じゃ防げないんでしょうが」

「だからなんだ？超電磁砲レールガンを打たせる暇は与えないぞ」

そういつて女は言葉通り、休む間も攻撃させる間も与えないようなテンポで、歪曲場を展開させる。

「くっ」

コインを取り出し指で上へ打ち上げる。

「無駄だと言ったはずだが」

コインは歪曲場の衝撃で後方へ吹き飛ばされる。

「隙ありい」

コインを囷とし溜めていた電撃をそのまま放つ。ふうと息を放ち歪曲場を発生させる。

「そろそろあきらめろ」

歪曲場を解く。その瞬間背後で床を蹴る音が聞こえる。振り向く事無く自分の周囲に歪曲場を展開させる。

「中に入ったらいいんだろ」

声と同時にわき腹に鈍い衝撃が走る。

「ぐぶっ」

司がコピーしておいた衝撃を拳に転写し、わき腹を殴り飛ばす。歪曲場が消失した隙に司と美琴は視線を一瞬重ね美琴はコインを跳ね上げる。司は美琴の直線上から外れるよう動く。バチバチとなった青い電撃が腕に絡みつく。

「おの・れえ」

左右の手をそれぞれに向けて突き出し、両方向同時に歪曲場の衝撃を発生させる。

「きゃっ」

「がっ」

不意をついた攻撃に防御も受身の余裕も無く吹き飛ばされる。しかし攻撃した女も片膝をつき、息を乱している。

「はぁ・・・はぁ・・・ごほっ」

左手で左わき腹を押さえる。骨は折れてないとなんとなくわかってはいるが、思いのほかダメージが大きいのか、体をゆっくりと立ち上げる。

「ぐ・・・うっ・・・あああ」

女は右手で頭を押さえだし、身を屈める。ふらふらと立ち上がり、まるでよっぱらいのように、赤子のようにふらふらとよるける。押さえた指に力が入る。

「ジャマダアア」

そういつて誰とも知れぬものへ叫ぶ。左手で頭を押さえ、右手を突き出し、歪曲場を発生させる。照準はあいまいで、まるで女にしか見えない相手に向けている。やみくもに能力を乱射し、フロア内を破壊していく。

「キエロオオ」

右手の照準が美琴と重なる。よろよると起き上がり掛けている美琴も、その右手の照準が向いている事を確認しているも、思うように体が動かない。

「くっ」

「ガアア」

「お姉様」

ふいに美琴の隣に相棒の姿が現れ、美琴は少し驚きの表情を浮かべる。本来はここではなく病院のベッドに寝ているべきは・・・

「黒子、あんた」

次の瞬間に黒子に触れられた美琴は、今いる場所から転移し女の側面方向に姿を移した。

直後美琴のいた場所に歪曲場の小さな歪みが発生する。美琴を移動

させたので力を使い果たしたのか、その場に黒子は横たわったまま動かない。

ドン、という音の直後に周囲を衝撃で吹き飛ばす。

「黒子お」

美琴の目に入ったのは吹き飛ばされた黒子、ではなく黒子をかばうように腕の中に抱きとめたまま、吹き飛ばされた司の姿だった。そのまま連続で衝撃もすべて司の背中で受け止めている。

「今です」

そういつて司は叫ぶ。

「言われなくても」

いつもの如く滑らかな動きでゲームセンターのコインを上上げる。

「ぐ……う……」

正気を取り戻したのか、女は能力の乱射がとまる。バチチイと右手に雷撃を宿す。雷撃を纏いう少女の元へ、くるくると回るコインが落下を始める。

「これで終わらせる。誘拐した人たちも……すべて返してもらおうわ」
「お……のれ……」

落下して来たコインを親指ではじきだす。電磁的加速を得たコインが、音速を超え電磁線を描きレーザガンが打ち出される。女が歪曲場を生み出すより早く打ち出されたコインは、女が発生させた歪曲場のシールドに電磁的な力を削り取るも、圧倒的加速得たコインはそのシールドを突き破り女へ直撃をする。コインの速度に吹き飛ばされ床をすべり、後方の壁にぶつかり運動力はようやく0になった。

「く……う……」

苦痛に顔を歪め、ぐったりと体を床に預け静かに気を失った。

T22 決着（後書き）

やはり最後は美琴かなと。

そして黒子のアシストなしでは語れないかと。

さーパラトラもクライマックスに向けて、進んで行きますぞえ。

T23 解放〜リベレイション〜（前書き）

ついに23話です。リベレイションてたしか黒ひげが言ってたやつなので、ただ言いたかっただけです（笑）

今回は前回の戦い終わった直後です。

どうぞー

T 23 解放リベレイション

「だ、大丈夫ですか」

誘拐された人たちを救出・解放していた涙子と初春が下に降りて来ていた。

「あ、初春さんに佐天さん。誘拐された人たちは？」

美琴はそう言つて二人の方へ歩いてくる。女は完全に気を失っているらしく、先ほどの場所に倒れたままである。司は預けておいた四角いケースを涙子から受け取り、女となり座り込んでいた。

「今アンチスキルの方達と一緒に、救急車へ搬送をしています。」

「そう。全員無事だったの？」

「ええ。誘拐にされていた人の名簿と一致してますし、全員大丈夫だと思います。中にはすぐに病院に搬送しなければならぬ人もいますけど」

「なら湾内さんも無事だったんだ・・・よかった」

美琴はほつと胸を撫で下ろした。

「上で警備員アンチスキルを呼んで来ます。白井さんを運ばなければいけませんし」

「あ、初春。あたしも手伝うよ」

そういつてまた上の階へと登って行く。

「黒子・・・」

黒子は目を閉じたまま壁を背もたれにして座っている。女の攻撃をかばった司が、黒子を今の場所へ運んでいた。美琴は黒子の頬を優しくなでる。

「こんな状態なのに・・・ありがとう」

そういつて美琴は微笑んだ。背後でパカと言う音が聞こえ振り向くと、司が四角いケースを開け何かを取り出している。

「あんだ、何するつもり」

司の背後から声を掛ける。司は振り向く事無く、赤い液体が入った

小さい試験管のようなものを女の腕にあてがう。

「これは脳波を安定させるもの。病院で話したけれど、レベルアップ幻想御手の際に埋め込まれた脳波のノイズを除去するためのモノなんさ」

そういつて強めに腕に押し付けると、プシュっという音と共に中の液体がどんどん減っていく。話を聞くとこれは勝手に血管を探してくれる機能があるという。液体が無くなったそれをケースにしまい、女の表情を伺う。

「ん……」

目がぴくりと動き薄く開かれる。司の存在に気づいたのか、瞳が司の方へ動く。

「あ……れ？仁科さん？」

声はかすれ力なく発せられる。

「そうだ。おはよう」

「あ……た……し……」

そう言つて女は目の端からぼろぼろと涙がこぼれる。

「ご……めんね。みんな……迷惑……かけて」

ポロポロと彼女は無心でつぶやきます。誰に言うでもなく、ただただ彼女は呟く。

「みんな……ありがとう……」

「この人助かった……の？」

「ええ、やっと解放されたんです。幻想御手から……木原という呪縛から……」

ただただ見えない誰かに謝る女を美琴は見つめる。目の端から涙を流している彼女を。

「彼女……まさか……」

美琴何かに気づいたように表情が驚きに変わり、声が詰まる。

「ご……めん……ね……御坂さん……白井さん仁科さん」

そして何かに触れようとして手を伸ばす。

「ごめん……ごめんね……初春」

そう言つて彼女の手は床へと落ちた。

「美坂さん、だまつててごめん」

そういつて司は彼女を抱き上げる。その直後、轟という音と共にこのフロアに強風が吹く。手をかざしつつ美琴がみたのは、円形に青白い線が浮かびその内側がブれて歪んだような空間が見える。それに向かって司は歩いていく。

「ちよつと」

美琴の言葉に司は振り向き笑顔を向ける。

「美坂さん・・・ごめんね・・・ありがとう」

そういつて司の姿は、歪んだ空間が消えたと同時に消えてしまった。

後日、誘拐された被害者を無事救出、犯人逮捕というニュースが報道された。

この件に関し、^{アンチスキル}警備員等各方面には緘口令が布かれた。

T23 解放〜リベレイション〜（後書き）

ちよつと短かったですね。

あえて語らず、干渉せずさつと帰っちゃいました。

いろいろ書いてたのですが、これの方がすつきりかなと思って（笑）

さて残りは2話なのですが、実質1話なので明日が最終回です。

みなさん、長々とお付き合いいただきましてありがとうございます。

無事に完結させられそうです。

それでは最終話であいましょう。

T24 それぞれの日常 司のそれから（前書き）

最終話のうち、司の方です。

もともと1話だったのをわけました。

それでは最終回1話目どうぞ

T24 それぞれの日常 司のそれから

あの誘拐事件から数週間・・・

兄・清隆への報告も終わり今では日常生活をおくっている。学校生活、風紀委員も復帰し司本来の世界で、本来の日常。司は帰ってきたんだと、これで木原にまつわるものは終わったのだと実感していた。

「司ちゃん」

司が振り向くと手を振りながら前髪をカチューシャで上げた少女が走ってくる。

「絆理か。今日もバイトか？」

走ってきた彼女は、息を切らせながら司の服の袖をつまむ

「んーん、違うよ。今日は休みだから司ちゃんと遊ぼうと思って」
そういつてまつすぐなまでの笑顔で見つめてくる。そんな笑顔を見ると成長した幼馴染？の少女の事を可愛いなと思ってしまう。絆理は結構キレイな顔立ちをしている、性格も明るいため割とよってくる男は多そうな感じがするが、以前そんな話をした時は女子高に通っているため全然無いらしい。下校中や休日は声を掛けてくる男はいるらしいが、本人は無自覚だがふわふわしているため、男はすべて撃沈されているという噂も聞く。

（ちよっと・・・天然・・・なんだよ）

そんな失礼な事を思いつつ、ちよっとにやけつつ彼女の頭を撫でる。

「えへへ」

うれしそうに顔を赤くして、司へ抱きつく。ちよっと驚きつつも少しはうれしい司だったが、前方からの強烈な殺気に一気に血の気が

引いた。

「あらあらまあまあ。学校帰りにかわいい女の子とデートとは……、いいご身分ですこと」

背後から聞こえてくる独特ある口調の声に、恐怖を抱きつつゆっくりと後ろを振り向く。

「や、やあ……白井さん」

「白井さん？」

その単語に不機嫌な顔になる。暫く別の世界にいたため、黒子の事をずっと白井さんと呼び続けた癖が出てしまった。慌てて訂正するも鋭いナイフのような黒子の表情に変化はない。

「まあまあずいぶん他人行儀ですこと」

「あ、黒子ちゃんこんにちは」

そう言つて絆理は黒子が不機嫌とも夢にも思わず、ふんわりと挨拶をする。

「枝先さん、ごきげんよう」

司は黒子のパーフェクトスマイルをみて、確実に怒りのメーターがMAXに近い事を悟った。

(まずい……こ……こは……)

一瞬の隙を突いて、走り出す。

「あ、司ちゃん」

「あ、司さんおまちなさい」

黒子と絆理は司の後を追いかける。

「捕まえましたわ」

黒子の空間移動テレポルトで司を背中側から抱き止めるように捕まえる。

「あたしも捕まえた」

そついつと絆理も司に抱きつく。

「ちよつと、私のが先ですよ」

「えー、だつて昔司ちゃんが、あたしとずっと一緒にいるって言ってくれたもん」

「過去の話は今は関係ないんですの。でもそんな事を……司さん

「どうなんですの」

左右に抱きつかれてギャーギャー騒いでいる二人の少女に呆れながらも、周りの視線が痛いこの場を一刻も離れたいと司は思っていた。「楽しそうですね」

初春と涙子がいつのまにか三人のそばに来ていた。

「そ、そう見える??」

「三人とも仲良いですね」

「まあ、なんかやつと日常を取り戻せた〜って気がします。」

二人はいつもの調子で笑っている。司も二人を見て笑う。現在は涙子は清隆の施設にて、リハビリを受けている。そして止まっていた二人の時間を取り戻そうと、よく初春は涙子と街を散策している。

「私もまざっちゃおー」

そういつて涙子も司の腰の辺りに手を回す。

「ちよ、佐天さんて」

「いや〜あたしを助けてくれた恩人ですから。惚れて当然です」

そういつて一人の男性に三人の少女が抱きつく姿を見た初春は、あははと引き気味に笑うしかなかった。涙子は二人をからかうようにただじゃれ付けてるだけなのだが・・・。

「佐天さん、離れなさい。こんなほかの女性に抱きつかれる男性は、佐天さんにはよくないんですの」

「えー私は司ちゃんなら大丈夫だよ」

「あなたには聞いてませんの」

「あ、あたしも平気です。それくらいの方が」

自分の周りでワーギャー騒いでる彼女達の一瞬の隙を突いて振りほどく。彼女達の拘束から逃れた司は、すぐさま初春の後ろに隠れる。初春の肩越しに顔をのぞかせると、思った以上の黒いオーラが。

「初春・・・あなた・・・」

「うーいーはーるー」

「かざりん・・・ライバルが増えた」

「えっと・・・あの・・・私は・・・」

困惑する初春に迫る三人。すでにその背後から司は走り出していた。「あ、こらまちなさい」

後ろから聞こえる声をよそに、鳴り出した携帯に出る。

「もしもし、こちら仁科」

「司さん、通報がありましたので現場へ行ってください。と美里は楽しそうに騒いでいるあなたに、無常なまでに仕事を押し付けます」

「今は助かった・・・」

本気で安堵した司。後ろから黒子が追いかけてくる。

「司さん、明日・・・わかってますの？」

わかってる、というように拳を突き上げる。

「わかってるさ・・・」

そういつて明日の準備の事を頭によぎらせる。

どんな言葉を交わそうか・・・。

どんなゲコ太を贈ろうか・・・。

そんな事を考えながら、今日もみんなは生活いしていく。

T24 それぞれの日常 司のそれから（後書き）

こんな感じですよ。

最後はごちゃごちゃな感じですけど。

ちなみに美琴の死から2年経っているので、
引きずりつつも、前向きにみんなは生活しています。

それでは次は美琴です。

T F i n a l e それぞれの日常 美琴達のそれから(前書き)

司達が自分の世界へ帰ったあとの、美琴たちです。

ついにフィナーレです。

どうぞ

T F i n a l e それぞれの日常 美琴達のそれから

あの誘拐事件から数週間……

仁科司がいなくなったこと、誘拐事件がひとまず終わりを告げたこと。

ニュースでは誘拐事件の事など無かったかのように、芸能人の結婚のニュースを伝える。

「あ、そうだ。」

「今度またクレープの限定マスコットのプレゼントあるらしいですよ」

「えええ、ゲコ太の？」

ものすごい勢いで目を輝かせて涙子の顔に、急接近する。

「え、ええ。今度の日曜日なんですけど」

「お姉様……またそんな」

「い、いいじゃないのよ」

赤面する美琴を黒子がいつものように窘める。

「まあまあ」

多少いつものやり取りに苦笑しつつも、いつも通りの日常が帰ってきた事を4人は実感する。

「それだからお姉様は……」

そう言いかけた黒子の顔を、美琴を思い切り至近距離で見つめる。

「な、なんですの」

（こ、これはもしかして……。き、ききき、キスする合図なんですのね）

黒子は顔を赤らめて、目を閉じる。

「お・ね・え・さ・」

その口を美琴は手で塞ぐ。

「くうろおこお」

「うおぼべえうば」

いつもであればここで怒った美琴が、黒子へ電撃でお仕置きする・
はずなのだが、今日の美琴の顔はにやりとしていた。いつもは黒子
が担当のはずなのだが。

「昨日の黒子の寝言・・・ばらすわよ」

「な・・・」

さらに黒子は顔を真っ赤にさせる。

「あんたからまさかねえ」

そういつて美琴は仕返しとばかりに口撃してくる。

「えー、白井さんどんな寝言を言ったんです？」

初春は興味津々といった表情で目を輝かさせる。いつぞやのリミッ
ター解除状態のような・・・。

「あたしも聞きたいです。どんな寝言だったんですか？」

涙子も聞きたそうに手を挙げる。

「あ、あな・・・あなたたち」

怒っているのか恥ずかしいのか、わからないくらい真っ赤な黒子。

「実はねえ・・・」

「あわわわ、お姉様」

そういつて黒子は美琴と一緒に消えてしまった。

「あ、逃げた」

「レポート空間移動はズルいですよ、白井さああん」

初春の声がドラ もんの映画の時の、の 太ばりに叫んだ。

「あの時、気づいてたんでしょ？あいつがあんたをかばった時。あ
いつの腕の中でさ」

「おお、お姉様。何を言ってますの」

「隠さなくっていいじゃない。昨日のあなたの寝顔……すつごく幸せそうだったわよ」

「そそ、それはお姉様とあんなことやこんなことを」

「司さんありがとう……もう少しこのままで」

美琴のその言葉に左手で書いた漫画のように表情が崩れ去る。

「あ、あの……え……ええつと」

黒子は慌てふためきしどろもどろになっている。

「いいじゃない隠さなくても。今の感情も素直な黒子の気持ちでしょ」

下を向き顔を真っ赤にさせ、何を言っているかわからないくらい小さい声で何か言っている。

「きつとさ」

「え？」

「きつとまた会えるわよ」

そういつて美琴は黒子へ微笑む。

「そうですね。その時は、きちんとお礼をお伝えするんですの」

「うん」

そういつて今いる高層階のビルの屋上から街を見下ろす。人々が生活し、いろんな人が集まっている。その中に彼はもつけない事を頭では理解している。それでもどうにもならない感情が、確かに黒子の中に存在していた。どんな気持ちか黒子にはまだわからない。ただたしかに昨日は彼の傍にいた……夢の中で。

（いつかまた……会えますわよね）

そんな事を考えていた黒子を穏やかな時間から日常へ引き戻すかのように携帯が鳴る。

「白井ですの」

「白井さん事件です」

「どうしましたの？初春」

「襲撃事件が起きたと固法先輩から」

「襲撃事件とは物騒ですわね」

「黒子・・・行こう」

「はい、お姉様」

黒子は美琴の手を取り、街の中へと飛んでいった。

「ねえ、お姉様」

「なに？」

「ほんと、退屈しませんわね」

「うん」

美琴と黒子の言葉が重なりあう。

「」「この街は」「」

T F i n a l e それぞれの日常 美琴達のそれから（後書き）

こんな感じですよ。

ちなみにシンフォニストで、仁科の名前がでてきますが、仁科がもとの世界に帰った後という時系列で、繋がっています

美琴たちは今日も、これからもこの待ちで生き続けていきます。

ついに最終話を迎える事ができました
稚拙な文章で、表現力も足りませんが
お読みいただいた皆さんのおかげで、ついに完結できました。
他の2作品はのんびり書いていくので、気が向いたら読んでみてください。

それではまたお会いしましょう

本作品、とある時空の並行旅人（パラレルトラベラー）をご愛読頂
きまして、本当に・・・本当にありがとうございます。

心から感謝申し上げます、本作品を終了したいと思います。

それではまたお会いしましょう

完結したのでキャラの簡単な設定でも公開（前書き）

完結したので、キャラの簡単な設定を書いて見ました。
知りたい事あればお応えします（笑）

完結したのでキャラの簡単な設定でも公開

にしな つかさ
仁科 司

荒宿高校2年生

ちなみに荒宿は、新宿から名づけました（笑）

能力：複写転写
マルチコピー

触れた物質、衝撃、能力をコピーできる。

コピーできるものは1度に1つ。

転写については物質に至っては1万前後複写できる。

衝撃は1000の衝撃を受けたら1000を1回出すか、100を10回に分割して放出できる。受けた衝撃以上は出せない。

能力も同じ、100の電撃を受けたら100を1回出すか、分割して出す。

原作のとあるの世界の並行に位置する、パラレルワールドからやってきた男子。

司の世界では能力ゆえに木原幻生の、実験体にされていたが実兄清貴によって救われる。

木原の使用した多才能力を研究していた者によって、別世界から能力者を拉致するという計画を知り、阻止するために原作の世界へとやってくる。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

敵の女

能力：時空歪曲

ディストーションウェール

周囲の空間を歪ませて光学系の攻撃をそらす一種のバリアを展開する。

高速の質量攻撃に対しては弱い。

また歪ませた時に発生する衝撃により、相手を攻撃することも可能。

木原の幻想御手により昏睡、そのご一木原の自我（木原ウイルス）によって行方不明となる。

そして時空歪曲を使う能力者となった彼女は、原作の世界へ能力者を誘拐にやってくる。

彼女の正体は司の世界の佐天涙子。

最後は司が注射した血清によりウィルスを駆除、意識を取り戻す。

現在は司の兄、清貴の施設でリハビリを受けつつ生活している。

ちなみに時空歪曲の能力者となっている。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

仁科 清貴

にしな

きよたか

研究者

能力は不明

成績優秀であり司にとっては、目の上のタンコブ。

学園都市の研究者の中で、子供たちに対し愛情をもって接する数少ない人物。

一方通行も唯一認めた研究者であり、よき理解者でもある。

もともとは木原幻生の元にいたが、数々の証拠を元に失脚させる。

今では先進教育局の所長。

- - - - -

木原 幻生きはら げんせい

研究者

能力：多才能力マルチスキル

幻想御手によって繋がれた能力者の能力を使用できる。

演算は能力者たちにさせるため、自身の負担が少ない事が利点。

もとは先進教育局長だったが、清貴により失脚。爆発とともに死亡したと思われていたが、密かに研究を続けていた。

幻想御手により能力者達のネットワークを作り、美琴たちを圧倒した。

自らがレベル6になる事を目標としていたが、最後は御坂美琴と相打ちとなり破れる。

しかし、木原に着いていた研究者達はひそかに木原の研究を受け継ぎ、次の段階へとシフトしていた。

完結したのでキャラの簡単な設定でも公開（後書き）

こんな感じでした。

ご愛読ありがとうございます。

他の作品も宜しくお願いいたします。

何か設定で聞きたい事とかあればお気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6475/>

とある時空の並行旅人～パラレルトラベラー～

2010年10月11日22時57分発行